

## 第三章

### ブリヤートの言語政策



1882年のブリヤート人学校の授業風景（加納格『ロシア帝国の民主化と国家統合』（御茶ノ水書房）より転載）

## 第三章 ブリヤートにおける言語政策

- 3-1, 民族解放運動と言語改革
- 3-2, ロシア革命後の言語政策
- 3-3, ラテン文字改革運動(1929~1938)
- 3-4, キリル文字化へ(1938~)

モンゴル系諸族において、近代化、民族復興の文脈で最初に言語に関する議論が起こったのはブリヤートである。それは1902年ごろのこととされる。

こうした議論の中で1910年、サンクトペテルブルグにて『ブリヤート口承文芸選』という本が出版された。それは言語改革の一案としてバザル・バラディンによって民族学研究の装いをまといながらラテン文字化を提案したものであった。しかし、この本は、その数年後始まった第一次世界大戦などの影響などもあり、それほど大きな反響を及ぼすことはなかった。

1926年、バラディンは再度、第一回民族文化会議にてラテン文字化を提案するが、やはり多くの人々の支持を受けられなかった。

1929年、ソヴィエトの各地でラテン文字化への機運が高まってゆき、ブリヤートにもラテン文字化の波が押し寄せる。このような中、二つのラテン文字化計画案が発表される。バザル・バラディンとレニングラード大学のモンゴル語学者ニコラス・ポッペによるものである。

両者の意見はかみ合わず、文字体系、正書法、表記される方言いずれにおいてもお互いを批判しあうが、次第に中央から派遣されたポッペ案が優勢となる。

ラテンアルファベットのポッペ案とバラディン案は違った原則を持つものであった。ポッペ案は、一字が一音を表すことを原則とし、アルファベット26文字に特別な記号が加えられたのに対し、バラディン案は、chやzhなど、二字で一音素を表すことで、26文字のなかで全てを表せるようにした。バラディン案は、第一章で述べたようなソ連に存在する全ての民族言語の音素を表す文字を統一しようとする意図から離れていたため、1930年、ヴェルフネウディンスク（現ウランウデ）で行われた正書法会議では採用されたものの、同年アルマアタで行われた会議では批判され、最終的に1931年のモスクワでの会議でひっくり返され、ポッペ案の採用が決まる。

この後、正書法案、表記される方言の設定でも、バラディンを含め、モンゴルを視野に入れた改革を進めようとする人たちは排除されてゆき、1936年には現在使われているホリ方言が言語学会議で採用される。

また、すでにこの会議のころからブリヤートでもキリル文字化が考えられるようになり、1938年5月に言語学会議が開かれる。この会議でキリル文字化案の提出されたサンジェーエフ、ダシエフ、アモゴロノフの案の中から、サンジェーエフ案の採用が決まり、1939年5月に「人民の要求を考慮し」キリル文字化が採用が決まる。

この20世紀初めから、最終的にキリル文字化が決まるまでの過程を、本章で詳細に検討する。

### 3-1, 民族解放運動と言語改革

## モンゴル文字・キリル文字・チベット文字

1929年のラテン文字化以前、ブリヤート人たちに最も多く使われた文字はモンゴル文字であった。ブリヤート人が文字を扱った最古の記録は、1685年イルクーツク要塞にカルムイクのプシュト・ハーンの使者が「ムンガル語」で書かれた国書を携えてきたとき、それをロシア語に翻訳した「ブラト人サルバイコ」であるという[クドリヤフツェフ(1943), 393]。

モンゴル文字はチベット仏教とともに17世紀に、南のモンゴルから入ってきたといわれる。そのため、この文字で書かれた文献は仏教関係のものが圧倒的に多い。

その後1740年の「草原管理局」や1822年にスペランスキーの改革によって導入された草原議会のシステムにより、公文書や議事録、草原法やその他の法規もこの文字によって書き付けられるようになり、各地域毎に年代記が残されるようになった。

1895年には最初のブリヤート語新聞、『東の辺境の生活』が発行された。

その他にも、モンゴル文字は19世紀から始まる学校教育の文字として使われていた。

しかし、何よりも、モンゴル文字の読み書きができることによって内モンゴルや、モンゴルで作られた様々な本に触れることができたのである。

モンゴル文字の伝播にはチベット仏教が大きな役割を果たしたといわれるが、チベット仏教寺院でモンゴル文字よりもさらに高い地位にあったのがチベット文字である。

モンゴル文字の修得はチベット語によって教義の主だったものを修得した後で初めて行われ、モンゴル文字の知識はあまり寺院では高い価値を持たなかった。その重要な役割の一つが、チベット語の文献をより民衆に理解しやすい言語に翻訳することにあったからである。モンゴル、ブリヤートのチベット仏教教育においては、モンゴル文字よりもむしろチベット文字で書かれた文献が重要視されたので、モンゴル文字を知らなくても、チベット文字をしっかりと教えられた人が多くいた。このためロシア・モンゴル間の貿易の記録文書や個人的な手紙を個人的なメモなどをチベット文字でブリヤート語の音をあてながら書いたという記録が残っている[Montgomery(1994), 89, 97]。また、サンスクリット語を知る者もいたと主張する者もいるが、20世紀の初めにブリヤート人バラーディンがチベットに行った際、一つの街を成すほどのブリヤートの人々がそこに住んでいたことを記録していることを考えればそれも充分考えられる。[Чимитдоржиев(1991), 27]

しかし、バラガンスク、イダ、クダ、ヴェルホレンスク、オリホンといった西ブリヤートにチベット仏教も、モンゴル文字も広まらなかった。1853年「ラマ教団法規」がニコライ一世に採決されることによって、仏教の布教が禁止されたからである。西ブリヤートにおいては、モンゴル文字の修得が妨げられた一方で、それ以前からロシア人との交流によって、ロシア語とそれを表現するキリル文字を習得するものが現れる。中にはキリスト教徒になる者も出てきた。その中からキリル文字によるブリヤート語の表記を考える人が出てきたのは1830年代のことであった。

ロシア革命に至る間にブリヤート向けに書かれたキリル文字作品は幾つか存在する。キリスト教宣教用のパンフレットなどの他、ボロドノフが作った『ブリヤート学校でのロシア語と読み書き学習初等読本』など、ロシア語を学ぶための教材でロシア語とキリル文字

の

**A Late 19th-Century Buriat Cyrillic Alphabet  
Created by Orthodox Missionaries:**

|               |                            |
|---------------|----------------------------|
| А, а          | А, а                       |
| У, у          | U, u                       |
| О, о          | O, o                       |
| С, с          | S, s                       |
| Р, р          | R, r                       |
| Д, д          | D, d                       |
| У, у          | U, u                       |
| О, о          | O, o                       |
| Ш, ш          | Sh, sh                     |
| Л, л          | L, l                       |
| М, м          | M, m                       |
| Э, э          | E, e                       |
| О, о          | O, o                       |
| У, у          | U, u                       |
| Э, э          | E, e                       |
| О, о          | O, o                       |
| У, у          | U, u                       |
| Т, т          | T, t                       |
| И, и          | I, i                       |
| И, ий, ий, ий | T, t                       |
| Ж, ж          | Zh, zh                     |
| Н, н          | N, n                       |
| З, з          | Z, z                       |
| Д, д          | D, d                       |
| Х, х          | Kh, kh                     |
| К, к          | K, k                       |
| Г, г          | G, g                       |
| Б, б          | B, b                       |
| й             | joj (in diphthong)         |
| Я, я          | la, la                     |
| Ю, ю          | lu, lu                     |
| Ы, ы          | Y, y                       |
| Ё, ё          | lo, lo                     |
| ГХ, гх        | H, h                       |
| П, п          | P, p                       |
| Ъ, ъ          | (Indicates palatalization) |
| Е, е          | le, le                     |

From the anonymous *Bukvar' dlia obucheniia gramote i russkomu iazyku v buriatskikh shkolkakh* (Irkutsk: Irkutskaiia Perevodcheskaia Maniastila, 1899), p. 10. The letters are listed in the order in which they are introduced.

xiv

表3-1 キリル文字によるアルファベットの一例

ブリヤート語の二つを対照した形で載せた本もある。

[Montgomery (1994), 143-145; Елаев (1994), 44-45]。19 世紀のキリル文字を使ったブリヤート語の例として図 1 を参照していただきたい。

西ブリヤートにおいては仏教に触れる機会よりロシア人との接触や、ロシア語を学ぶ機会の方が多かった。そのため、整備された文字体系を持ったものではなかったが、個人の覚え書きを書き付ける文字として、東ブリヤートにおいてチベット文字が担った役割を西ブリヤートにおいてキリル文字が担ったのである [Елаев (1994), 31]。

### 土地問題から民族運動、 民族運動から啓蒙活動へ

1822 年草原議会が成立、自治を享受してきたブリヤートであったが、1900 年前後に状況が次第と変化してゆく。また 20 世紀初めの行政改革の結果、草原議会や民族行政機関が取り潰され、ロシア人と同一の行政機関と裁判所に統合されることになり、自治を失った。

また、ロシア人やウクライナ人などのスラブ系農民の入植が進み、植民資本が土地のかなりの部分を占めるようになった。このことは広い土地が必要な遊牧業を営むブリヤート人たちに大きな打撃をもたらした [История Бурятии (1993), 12]。

これは 20 世紀の初めにヨーロッパ・ロシアで土地不足が深刻化したことと関係がある。このため、ロシア各地で一揆が続発したのである。1905 年の第一革命後、1906 年ストルイピンの土地改革で農民が土地に縛り付けていた共同体を自由意志によって離れることがで

きるようになった。シベリア鉄道の開設や、安全保障の面からのロシア政府のシベリア人口増加政策と相まって、シベリアへの移民が急激に増える。

1911年、バイカル湖西部イルクーツク州のブリヤート人口は約12万8千人、バイカル湖東部では約20万4千人であった。このうち、バイカル湖東部地方のブリヤート人の人口は、全体のほぼ3分の1であり、バイカル湖西部のブリヤート人はロシア人の5分の1であった[Forsyth(1992), 173]。移民の急激な増加の結果、人口的に圧倒的に不利な状況になってしまったのである。

このような状況下で危機感を持ったブリヤート人たちは民族意識を強く持ち始める。日露戦争最中の1905年1月には、ヴェルフネウディンスクで第一回ブリヤート会議が行われた。この会議で民族の啓蒙の問題が提起され、啓蒙活動家、学者としてブリヤートのみならず、モンゴルでも名を残したツェウエーン・ジャムツアラノーを中心とした教師と民族教育活動家の同盟「ブリヤート民族の旗」が1906年創設された。

ジャムツアラノーはこの同盟の達成すべき目標に、民族の復興、啓蒙の促進、学校の「民族化」、「ブリヤートの統一された民主主義的(民族)自決」決、民族自治の獲得という4つを挙げた[История

Бурятии(1993), 15]。ブリヤート人の教師たち学校を「民族化」し、自分達の言語によって啓蒙を促進し、東西に分裂した民族を統一し、復興しようと考えたのである。

ブリヤートにおける文字改革の問題は、こうした民族復興運動における民族意識の高揚や啓蒙の手段として提起されたのである。

表3-2 ワギンダラ文字のアルファベット

ワギンダラ文字、ラテン文字による表記の試み

ブリヤート人同士の文字に関する議論は1902年にバザル・バラーディン、アグワンドルジェフ、ジャムツアラノーとブドドゥ・ラブダノフらがモンゴル文字の改革に関する議論を始めたことに始まる[Ринчинэ(1929) 57]。

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| Э г ш х г ү с ө г :   |   |  |  |
| 1. й а (а)  | 2. о о (о)                              |  |  |
| 3. и и (у)  | 4. э э (х)                              |  |  |
| 5. э э (э,е)  | 6. и и (н,е)                            |  |  |
| 7. о о (ө)  | 8. и и (ү)                              |  |  |
| Г н й г ү ү л ө г ч ү с ө г :   |   |  |  |
| 9. б б (б)  | 10. р р (п)                             |  |  |
| 11. ү ү (ң)   | 12. х х (х)                             |  |  |
| 13. г г (г)   | 14. к к (к,х)                           |  |  |
| 15. т т (т)   | 16. д д (д)                             |  |  |
| 17. з з (з)   | 18. ж ж (ж)                             |  |  |
| 19. с с (с)   | 20. ш ш (ш)                             |  |  |
| 21. ц ц (ц)   | 22. ч ч (ч)                             |  |  |
| 23. м м (м)   | 24. н н (н)                             |  |  |
| 25. п п (п)   | 26. л л (л)                             |  |  |
| 27. р р (р)   | 28. х х (х)                             |  |  |
| 29. у у (у)   | 30. в в (в)                             |  |  |
| 31. ф ф (ф)   | 32. ү ү (ү)                             |  |  |
| 33. ж ж (ч,дх)  | 34. д д (д)                             |  |  |
| 35. ш ш (щ)   | 36. н н (нь)                            |  |  |
| Ү с г и й н н ө м ө л т т ө м д ө г :   |   |  |  |
| 37. :-  | тагнайшсанн төмдөг - бийт.              |  |  |
| 38. ::  | эгшгийн уртын төмдөг.                   |  |  |
| 39. :   | цэг ( 6, 13, 14, 24, 33, 34, 35-ыг үз ) |  |  |
| 40. :   | дөгөө ( 3, 30, 31-ийг үз )              |  |  |
| Цөг т ө м д ө г х й н в ү й л :   |   |  |  |
| 41. 6   | хуудас эхлэсний төмдөг - бярга.         |  |  |
| 42. "   | таслах.                                 |  |  |
| 43. ж   | цөг.                                    |  |  |
| 44. л   | асуултын төмдөг.                        |  |  |
| 45. и   | анхааруулгын төмдөг.                    |  |  |
| 46.   | зураас                                  |  |  |
| 47. :   | цуваа цөг.                              |  |  |
| Үүнээс үзвэл Вагиндрагийн үсгийн тогтолцоонд европ дахын бичгийн нөлөө туссан гэж дээр бидний өгүүлснийг нутлах баримт захаас аван харагдахыг өргөцөө |   |  |  |
| -II4-   |   |  |  |

改革するという意識において彼らの意識は共通であったが、手段において大きく二つのグループに分かれた。一つはジャムツァラノーを中心とした新しい文字を加えたり、現在の文字を少しかえたりすることで現行のモンゴル文字を保とうとするグループであり、もうひとつはバラードイン主導のラテン文字を導入しようとするグループであった [Ринчинэ(1929) 57]。

モンゴル文字の形を維持しながら、若干の修正を加え、維持しようとするグループの中で積極的にこの活動に関わり、新しく文字を作り上げたのがアグワン・ドルジェフ(1853-1938)であった。

アグワンドルジェフは1853年、ザバイカル州ホリ管轄区のアツァガト(現アツァガト)で生まれた。父親にモンゴル文字の読み書きを習い、18才で父の薦めにより結婚するが、19才で出家。その後はチベットへ向かい、ゴモン寺院のブライブン廟へ入門する。二年後、8代目ボグドゲゲン、ジェプツァンダンバホクトの付き人としてウルガ(現ウランバートル)に向かい、さらに、ラサに向ってダライラマ13世の側近の一人となった。宗教人としての活躍は生涯続いたが、チベットの外交官としての顔も持ち、19世紀の終わりイギリスがインドを北上してチベットを侵略した際、チベットとロシアの間をとりもって、イギリスに対抗させ、チベットにロシアの影響力を及ぼす上で、大きな功績を残した。

彼は1648年にザヤ・パンディタが作ったトド文字を参考にしながら、ブリヤート語特有の口蓋化子音、摩擦音の *z*、*ʒ*、そして咽頭音の *h*、長母音を表す記号などを表す文字を作り上げ、1908年『心の鏡』という作品を発表する。この著作の前書きでは次のように、文字を作った理由を書いている：

モンゴル文字に付け加える補助的なモンゴル文字を作るときには形の美しさと、簡単さを考慮した。(モンゴル文字の) *a*、*e*、*o*、*u*の語頭形、語中形、語末形は様々な形を取るの、母語で書くのは難しいだろうし、幼い子供が読み書きを学ぶのにも難しいだろう。よって新しく文字を作り上げるにあたって、多くの省略、組分け、交換、統一、制限などをしなければならなかった。そのようなはっきりと区別がつけられた新しい文字を作ることを考え、バザル・バラードインやツェウエーン・ジャムツァラノーに相談し、その意見を考慮することにした。なぜなら、彼らもそのような文字を作ろうとしていたからである。私はこのようにして新しい文字を作ったが、学者たちが簡単さや明確さやに必要なものを決め、誤りを直して、このアルファベットがより簡単に、明確に(音を反映させるように)なるように望む。 [Доржиев(1998), 251]

また、このアルファベットの中にはブリヤート語音の他に、ロシア語の音を写す文字も入れられていた。単語の綴りは極めて忠実に音に忠実に書かれていたという。ワギンダラ文字は前頁の表3-2の通りである。

保守的な僧侶などはこの運動に反対の立場をとった。教育関係では1906年5月のブリヤート教師社会啓蒙家同盟がワギンダラ文字をブリヤート人学校に、特に西バイカル地域の学校に導入を呼びかける声明を出し、1910年のニコライ・アマガエフ(後にモンゴルで活

躍するアマガエフの兄) とアラムジ・メルゲン (エルベク・ドルジ・リンチノ) がワギンダラ文字で書いた著作の中で、「しっかりと有機的に根を下ろし始めた」と書くほどまでにこの文字改革運動は盛り上がっていた[Amaraev(1997), 5; Montgomery(1994), 158-159]。

一方のラテン文字案の考案者はバザル・バラディンであった。彼はすでに1905年には最初のアルファベット案を考えていたという[Поппе(1933), 95]。

ラテン文字案の具体的な提示した作品は、1910年、『ブリヤート口承文芸選 (buriaad zonoï uran eugeiin deeji)』である。バラディン自身やジャムツァラノーなどによって各地の収集されたブリヤートの民話が収録されたもので38頁の薄い本であった。10編の物語が収められ、クダ方言 (I)、オレホン方言 (II)、アラル方言 (V-VI)、そしてホリ方言 (III-IV, VII-X) といったブリヤート各地の方言でそのまま収録された。ロシア語で書かれた前書きには、この本はブリヤートの民話をラテン文字で「転写」したものであるとかかかれているが、ブリヤートの人々に向けたであろう「後書き」には、方言で記録された意図などまるで違ったメッセージが込められている。

知識というものに人々は唯一全てのことがわかる母語によってのみ簡単に到達できるはずである。生まれたときから使っていた言葉で読み書きができ勉学に励んだ民族は発展するが、そうでない民族は言葉を失い、他の民族の力におされ、獣のようになり、衰亡していくのだろう。こうならないため、仏教の教えが多くの人に広まる良い方法はどんな方法か、といえば、みんなが知っている、そして話している母語であるブリヤート語で文字の読み書きができるようになることであり、母語で勉学に励むことでなければならない。母語で勉学に励み、楽に早く学問の入り口に少々到達したところで古いモンゴル文字を学ぶ必要があるし、そのための準備をする必要があるだろう。「古いモンゴル文字のみで物事をおこなわなければならない」、あるいは「ブリヤート語で知識を学ぶ必要はない」というのは僅かな人だけが知識を持ち、多くの人は無知のままよい、というのと同じである。なぜなら、古いモンゴル文字は今、話されていないし、ただ単に本の中の言葉になってしまっている多くの人にはわかりづらくて学ぶことが極めて難しい言葉だからである。だから、この文字の言語ではわずかな人しか知識を得ることができない上に、多くのことを学び取ることができないのである。また、モンゴル文語は100年余り我々の土地に存在しているが、今も、100人の中で4人か5人ぐらいの人しか文字を知らず、(知っているも) 少し言葉(モンゴル文語)を知っている程度であることも(難しいということの)例として挙げられる。このような多くの理由から考え、モンゴル文字ではブリヤート語を書くことができないので、学び、書き、そして出版するときの簡便さを考慮し、ラテン文字を用いて、この新しいブリヤートのアルファベットを用いて作成した。この本の中にあるような物語を、話したときに理解しやすいブリヤート語で読み書きできるのであれば、どれだけ学習が簡単になるだろうかということの例として、この物語集を編纂し、本にして出版したのである。このような考えから新しい文字を作成し、このような小さい本を書いたのは古いモンゴル語の本や文字を置き去りにし、忘れさせるためではない。逆に、知識をブリヤート語で最初に修得させるだけが、ブリヤート語の本や、モンゴル文字や全ての知識を簡単に修得できるようになるためのただ唯一の窓なのだという考えから作ったものなのである。私がこのよう

な考えで作ったことを良くも悪くも批評される前に、良識ある人よ、よく考察の上そのことを御理解いただきたいのである。[Baraadiiin(1910), 37-38]

バザル・バラーディンは1878年7月10日、現在のチタ州アガ・ブリヤート自治州にあるモゴイトイの遊牧民の生まれである。地方の初等学校を卒業した後、チタ市の学校へ行き、その後、ペテルブルグにあったブリヤート人子弟のための学校に通い、そして1898年に故郷に戻り家業を継いだ。

1900年、ブリヤート人商人の通訳として彼は、3ヶ月間、ドイツ、スイス、イタリアをまわり、自分の外国語の知識を磨き、西欧の国々の見聞を広めたといいう。彼はブリヤート語、モンゴル語、ロシア語だけでなく、ドイツ語、英語、フランス語もできたといわれる。

その後、彼は1902年から3年間ペテルブルグ大学の聴講生となり、オリデンプルグ、シチェルバツキーといった高名な東洋学者の指導の下で学んだ。

1905年から1907年の二年間チベットへ旅行し、そこでの体験、調査をもとに言語、文学、文化に関する研究を残すことになる。帰国後1908年から約10年間、彼はペテルブルグ大学東洋学科でモンゴル語を担当する講師として働いた。

表3-1 1910年のバラーディンのラテン文字案

| Звуки бурятского языка.                                       |     |       |     | ТАБЛИЦА ЧТЕНИЯ. |     |     |    |
|---|-----|-------|-----|-----------------|-----|-----|----|
| Удвоенные.  |     |       |     | Примѣры.        |     |     |    |
| Основные:   | a   | o     | и   | e               | eo  | eu  | i  |
| Долгие:   | aa  | oo    | uu  | ee              | ooo | euu | ii |
| Двуетонги:  | ai  | oi    | ui  | ei              | eoi | eui |    |
|   | aii | oii   | uii | eii             | eoi | eui |    |
| Одвоенные.  |     |       |     | Примѣры.        |     |     |    |
| b   | p   | m     | n   |                 |     |     |    |
| d   | t   | r     | l   |                 |     |     |    |
| j   | s   | x     | c   |                 |     |     |    |
| g   | x   | h     | y   |                 |     |     |    |
| Латинскія буквы, вѣденыя для составленія бурятскаго алфавита. |     |       |     |                 |     |     |    |
| A a   | ᠠ ᠨ | I i   | ᠢ ᠶ | R r             | ᠷ ᠷ |     |    |
| B b   | ᠪ ᠪ | J j   | ᠵ ᠵ | S s             | ᠰ ᠰ |     |    |
| C c   | ᠴ ᠴ | K k*) | ᠬ ᠬ | T t             | ᠲ ᠲ |     |    |
| D d   | ᠳ ᠳ | L l   | ᠯ ᠯ | U u             | ᠤ ᠤ |     |    |
| E e   | ᠡ ᠡ | M m   | ᠮ ᠮ | V v             | ᠮ ᠮ |     |    |
| F f*)   | ᠮ ᠮ | N n   | ᠨ ᠨ | X x             | ᠬ ᠬ |     |    |
| G g   | ᠮ ᠮ | O o   | ᠣ ᠣ | Y y             | ᠮ ᠮ |     |    |
| H h   | ᠮ ᠮ | P p   | ᠮ ᠮ | Z z             | ᠮ ᠮ |     |    |

\*) Только для инициалов.



彼の創作したアルファベットにおいて特徴的なのは、使う文字をアルファベット 24 文字に収めたことである。発音を一つの文字で表現しきれない場合には、母音あるいは子音を組み合わせて対応し、外に特殊な文字を創作しなかった。図 3 の『ブリヤート口承文芸選』にあるアルファベット表である。文字を組み合わせてある発音を表現することは、ロシア語では見られないが、彼の知るドイツ語、英語、フランス語においてもみられる現象である。後に、彼はラテン文字化を提案する際、何度も利点の一つとしてタイプライターや印刷の技術に適合している文字であると述べている。後の議論で明らかになるが、ここには、特殊文字を作ったときの煩わしさをあらかじめ回避する意図があったように思えるのである。

とまれ、彼はアグワンドルジェフと別々の方向性を持った文字改革案を出すことにはなかったがお互いに仲が悪かったわけではなかった。それはアグワンドルジェフが最初に出版したワギンダラ文字案に相談者としてバラードインの名前が挙げられたことにも見え、モンゴル文字を修正する方の立場をとったジャムツァラノーが彼の著作の題字にバラードインのラテン文字を使っていたことにも見える[1998年3月11日、ブリヤート文学博物館職員サランゲレルさんとのインタビューによる]。また、バッドマエフ、Ц・ジャムツァラノー、Б・バラードイン、アグワンドルジェフなどによって設立されたナランという出版社ではアグワンドルジェフ文字による本が数冊出されているのである[Montgomery (1994), 154; История отечественного (1997) 368-369]。両グループはお互いそれぞれの立場を主張しながら、ともに民族を発展させるという共通の目的を持ち協力関係にあった。

しかし、ここで提案されたワギンダラ文字案も、ラテン文字化案も、広い支持を受けることがなかった。

先に述べた保守的な僧侶たちの反対や間もなく第一次世界大戦が始まってしまったことなども原因の一つと考えられるが、支持を受けなかった最大の理由は、民族意識が目覚めてゆく中で、ブリヤート民族を表す重要な指標の一つが、「モンゴル文字」にあったことにある。勿論アグワンドルジェフもバラードインもその点を意識し、モンゴル文字への「つなぎ」としての役目を彼らの文字に与えていた。しかし、その「つなぎ」としての役目を持つ文字でさえも、モンゴルというもっと大きな共同体との連帯を断ち切ってしまうのではないかと見られ、結局は拒まれてしまったと考えられる。

これとは別に、ペシミスティックな思想がブリヤート人の中に見いだされる。1907年、バラードインの親友とも評されるボグダノフは次のように述べている。

我々が、化石のように古いモンゴル文学を立ち直らせ、そして「民族的文芸作品の傑作」を生みだそうとする頃には、新しい生活様式が入ってくるだろうし、ロシアで力強く前進続ける資本という名の西欧文化の万能の神が、我々を踏みつぶしてしまうのではないだろうか？我々は理解しなければならない、それぞれの小さな民族集団が外の世界から完全に隔絶して自分たちの領域の中で住むことができたような中世に我々が生きているわけではなく、資本の発展の過程が全ての民族の差異をなくしてしまうような、どんな万里の長城をもってしても境を設けることができないような、そんな二十世紀に住んでいることを。我々を救うことになるものは、

我々が考える民族的特質を大事に守ることではなく、文明を素早く、しっかりと修得する可能性にあるのだ。このためにロシア語は欠かせない、ロシア語を修得することは必要であり、このことは新しい（訳注：ラテン文字）アルファベットの支持者たちも認めねばならない。

[Богданов(1907), 46-47]

著者の思想上の敵があれば夢にまで見ていたブリヤート語の復活、文学、科学、文化の誕生が、現実となるならば、著者にとってはいうまでもなく、（ブリヤートの）人々にとっても喜ばしいことである。しかし、寂しいことだが我々は次のような事実を確認しなければならない。ブリヤートはすでに時流に乗り遅れてしまっていることを、自律的な経済の時期が過ぎ、商業的な取引が行われることが生活のもっとも重要な要素の一部になり、社会分業は随分とすすんでしまい、独立した民族集団を作る時期はもうすでに過ぎ去ってしまったことを。そして作家や学者は市場の中でのみ働くことができるのだということを。ブリヤートの学者や文学者の作品を売るための市場は十分に広いものかといえるだろうか？ロシア語や他の言語のようなより広い読者層と、より多くの価値のわかる人たちと、より巧みな評価と出会える言語で自分の作品を読むことを好まないだろうか？ブリヤート文学はせいぜいよくても、みすぼらしくて不格好な翻訳から成り立ってしまうことにならないだろうか？[Богданов(1907) 48-49]

この時、この意見はすぐさまジャムツァラノーやクレメンツといった人々に批判される[Клеменц(1907); Жамцарано(1907a); Жамцарано(1907b); Жамцарано(1907c)]。しかし、ブリヤートを含め、ロシアの少数民族の現状を考えれば、いまでもこの文章がブリヤート史の教科書に上げられるほど深刻で、解決できていない問題であることは明らかである。特に言語の流通範囲を市場にたとえ、モンゴル語（あるいはブリヤート語）には魅力がなく、文学や学術論文を書く人々がロシア語へ向かうだろうというのは、現在、存在している傾向である。いずれにしても、ボグダノフがいたかったのはこの問題を解決できない限り、民族復興や啓蒙活動に未来はないということなのである。

### 3-2, ロシア革命後の言語政策

1917年ロシア革命が起こる。

白軍と赤軍の戦い、日本などのシベリア出兵などの混乱を経て、シベリア地域もようやく落ち着きを取り戻す1923年春、極東共和国とソ連邦に別れていた東西ブリヤートがひとつとなり、ブリヤート社会主義自治共和国が成立する。自治共和国成立以前から、東西のブリヤート人たちには自治権が与えられていた。東側は極東共和国が建国されるとすぐに自治権を与えられ、一方の西ブリヤートにおいては1922年にブリヤート・モンゴル<sup>1</sup>自治区が成立していたのである。

革命直後からブリヤート人たちは民族の言語による教育を認められていたが、内戦の混乱の中でほとんど実質を持たなかった。

1923年9月12日に採択された「ブリヤート・モンゴル自治共和国の国家構造に関する規定」では、ブリヤート・モンゴル語とロシア語は平等であると明記されていた[История Бурятии(1993), 44-45]

1924年4月26日、土着化の一環として、ブリヤート・モンゴル自治共和国中央執行委員会の法令により、ヴェルフネウディンスク、東部諸アイマック、西部のトゥンカ・アイマックの議会、労働組合、協同組合の諸機関は記録文書及び事務処理をすべてモンゴル文語で行うことが決まった[Montgomery(1994), 233]

そのような中で民族語を表記する文字をどうすべきかの議論がでてくる。

西ブリヤートではキリル文字を使い、教えている教師がいたことは先程述べた通りだが、この時期にも自分たちの知っているキリル文字を使ってブリヤート語を教えようとする動きも現れはじめた。

1924年7月、ボハン・アイマックのウクルにおいてアルファベットの問題が話し合われ、圧倒的多数の参加者がキリル文字の使用に賛成したという[Montgomery(1994), 271-274; БНЦ 471/1/64/111]。

これはその3ヶ月前、西ブリヤートの教師であるウブグノフが1924年3月21日の『ブリヤート・モンゴルの真実』紙でかいた「学校の民族化とブリヤート・モンゴル・アルファベット」という論文に影響されてのことなのかもしれない。ウブグノフはキリル文字の方がモンゴル文字より教育の目的に適し、やさしいといい、東ブリヤートにもキリル文字を受け入れなければならないと主張した。そして、彼はブリヤート語のキリル文字化を1920年代の終わりまで主張したという[Montgomery(1994), 275-276]。

それに対して、『ブリヤート・モンゴルの真実』紙の編集者であったインノケンティ・マルコフは1924年3月21日の『ブリヤート・モンゴルの真実』紙で音声的に明瞭すぎる文字を採用することに関して警告を發した。キリル文字の採用は、必然的にある特定の方言の発音を採用し、他の方言を排除するし、他の方言話者に使える融通性と能力を取り去ってしまうとし、また、モンゴル文字を捨て去ることは、ブリヤートを民族的、言語的に近い人々や、その文献を断ち切ってしまうことになるかと主張した[Елаев(1994), 56-57; Montgomery (1994), 276-278, 288-289]。

モンゴル文字の綴りがモンゴル諸語の口語の音声と乖離していることに否定的な評価を与えられることが多かったが、マルコフはこれを逆に利点と見たようである。

しかしモンゴル文字が現在の教育などの目的にあっていないと考えたのはウブグノフだけではなかった。次に検討する1926年の文化民族会議ではバラードインにより再度ラテン文字化が提案されるのである。

## 文化民族会議

1926年9月19日-27日、ヴェルフネウディンスクにおいてブリヤートにおける文化建設の問題を議論する文化民族会議が開催された。この会議には99人の参加者があり、また、モンゴル人民共和国からの二人の代表者を含む数人の招待客を迎えていた。

この報告会では九つの正報告と、それにそった形の二つの副報告がなされた。このうち五つが言語に関するものであり、残りは学校に関するものであった。

学校での仏教教育を議論するものはすでになく、ロシア化したブリヤート人バドマエフのみが西ブリヤートをブリヤートの文化民族建設に参加させることに異議を唱えた。

バドマエフはバイカル西岸地域では党会議の場で圧倒的にロシア語を使用していることを挙げ、西ブリヤート人たちが民族的特徴を失っており、ブリヤート語の社会的機能を拡大させようとするのが誤りであると主張した。このような主張と意見を同じくする西ブリヤート人たちものもいたが、多くのものがこの主張に反対した[Montgomery(1994), 281]。

この会議でバラディンは「モンゴル語文化の向上に関する問題」「ブリヤート・モンゴル民族学校とその課題」という二つの報告を行い、1910年以來二度目のブリヤート語のラテン文字化を提唱する。

領土と言語は民族性とその文化を決定する主要なものである。領土の統一性は民族性とその文化の基礎となり、言語は民族性や民族文化の重要な要素の主要な指標となるものである[Барадин(1926a), 7]

と彼は、モンゴル文字を維持しようとする人々が主張するその文字のモンゴル諸族をまとめるものがあると認めながらも、

全ての言語は、その形（文法や文字）や内容（イデオロギー）の文化的な資質の程度によって、人間の思考の様々な段階達成の武器となり、共鳴器となる。だからこそ、全ての民族は、その大小を問わず、自分たちの言語[の資質]によってしか、より高い文化へ障害なくすすむこと、近づくことはできないのだ。ある民族の民族文化の成功も同様に自分たちのことばやその形と内容の文化的な資質に、つまり、自分たちの思考の武器であり共鳴器であるものの完成度に左右されるのである[Барадин(1926a), 7]

と、モンゴル文字からラテン文字へ文字を変えることの根拠を示し、技術的、思考の武器、思想の共鳴器としてのモンゴル文字の欠陥を挙げた。具体的にはモンゴル文字が縦書きであるため化学式や数式を書けないことや、話し言葉からかなり乖離していることが取り上げられたが、非常に興味深いのは「文化的な言語[というものの一般的な傾向]に反して、専門家を除いて、近隣の他の民族にも広まる助けにならないこと。また他の言語話者にとって口語を修得する助けにならないこととともに、モンゴル人たち自身の外国語、例えばロシア語の修得の助けにもならないこと」と指摘していることである[Барадин(1926a), 8]。つまり、自分達の言語を他の言語話者に習得しやすいようにすることがここで想定されていたのである。他の文脈などからここで彼がまず思い浮かべていたのはおそらく北で接するヤクートのことであったのかと思われる。彼は、言語を維持していくためには言語を他の言語話者に「輸出」しなければならないと考えていたようなのである。

また、バラードインはラテン文字を採用するとモンゴル諸語の結びつきが壊れると考える人々に対して、ラテン文字をモンゴル国の中心的な方言であるハルハ方言を標準方言とした共通モンゴル文語の文字として採用することを主張することで対処しようとした。

ハルハ方言を共通モンゴル文語に採用する理由として、バラードインは「他のモンゴルの諸方言と比べると、文法的な形の簡便さと安定性から見て、より発展した言語であり、もっとも（モンゴル語諸方言の全ての話者にとって）中央に位置する、わかりやすい言語である」ことを挙げている[Бардин(1926a), 10]。

ラテン文字化の主張にツイディポフ、アユルシャノフ、バマソフなど賛成の立場にいたものや、ハバエフ、エルバノフなど原則的に支持する立場をとったものもいたが、多くの人々はラテン文字化に反対であった。

その理由は以下のようなものだったという。

- 1) ラテン文字は文盲一掃運動を遅くさせる
- 2) モンゴル人民共和国で出版されたものが使えなくなる
- 3) 「土着化」されつつある諸機関でも、モンゴル語は十分要求されるものに比べる
- 4) ラテン文字化を採用したら、みんな自分が喋るように書き、正書法をつくることは不可能になる。モンゴル諸語、諸方言の差を過小評価し過ぎている
- 5) モンゴル文語の欠陥は少々の正書法改革で克服することができる
- 6) 西ブリヤートは民族の文字の知識を熱望している[Montgomery(1994), 285-286]

また、後にブリヤート文学の父といわれる作家ホツァ・ナムサラエフはバラードインの提案はブリヤートの諸方言をハルハ方言の支配下に置くことにすることによって混乱を招くだろうと主張した[Montgomery(1994), 286]。ラテン文字化や民族運動で先頭に立って引っ張ってきたのは、バラードインを初め、ジャムツァラノー、アグワンドグジエフともにモンゴルや満州の国境に近いアガの出身者であった。一方のナムサラエフはシベリア鉄道よりも北に位置するキジンゲの生まれであった。

ナムサラエフがハルハ方言の採用に反対したのは、アガのような比較的モンゴルに近く、頻繁にモンゴルとの人の往来があったであろう地域と、そうでない地域ではハルハ方言の習熟度に格差が生まれることを嫌ったからなのであろうか。いずれにしても、ハルハ中心主義に全ての人が賛成していたわけではなかったのである。

このような議論の結果、この会議ではモンゴル文字によるモンゴルとの言語的な結びつきを重視し、現行の文字を維持することが確認され、バラードインの意見は否定されることとなった。

その一方で、モンゴルとブリヤートが共同で術語辞書を出すことができたのもこの時期だった。1928年、ヴェルフネウディンスクで出版された『ロシア語モンゴル語術語辞典』は、モンゴル文字で書いていた当時に作られた語彙が、モンゴルとブリヤートの間でどれくらい意見の一致、不一致が見られたかに関して見る限りにおいて非常に興味深い資料である。不一致があった場合は、モンゴルの表現にはMを、ブリヤートの表現にはBをつけ

て並べて書かれていた。しかし、2000 単語あまりのうち、このように並べて書かれていたものは 20 単語もないのである [Русско-монгольский (1928)]。

この成果から見れば語彙の作成に関しては、モンゴルとブリヤートが共同で作業ができたという点で言語の統合化に向けて以前より一歩先に進んだ時期でもあったのである。

こうして 2 度目のラテン文字化の提案も却下されたが、このころにはソヴィエト全体においてラテン文字化の波が起きていた。バラードインにもこのような「外圧」の力を借りて遂にラテン文字化に乗り出すときが近づいていた。

### 3-3, ラテン文字改革運動 (1929~1938)

#### 予兆

1928 年の初めには、ウイグル式モンゴル文字を維持する姿勢がまだ見られた。例えば Г・Р・リンチネは『ブリヤートの生活』誌で「ブリヤート・モンゴル語文化の問題」を発表し、モンゴル文語はブリヤート語を反映してはいないが、正書法を標準化し簡単にしようと主張していたし、ツィビコフも「民族文化の武器としてのモンゴル文字」というウイグル式モンゴル文字支持の論文を出していた [Montgomery (1994), 291; Цыбиков (1928)]。

ソ連邦中央の政策としてラテン文字化の議論がブリヤート語に至るのは、1926 年の文化民族会議で否定されてからまだ二年しか経っていない 1928 年 12 月 6 日から 16 日にかけておこなわれたブリヤート地方委員会第六回会議であった。ウイグル式モンゴル文字によるブリヤート・モンゴル語の難しさやラテン文字化を主張しようとしたものを、会議の代表者の一人ドルジ・アルディンが批判したことに対して、オシロフという別の参加者が以下のように発言している。

レーニンはラテン文字化が東方の革命であるといった。このことばをテュルク系の人々やアラビア文字にのみ当てはまることばと考えるてはならない。レーニンのことばは我々にも当てはまる言葉なのだ。結果的にいえば民族民主主義者バラードイン同志はこの問題に関してアルディン同志よりも前衛的な位置にいる。(しかし) 私はすぐにラテン文字化を宣言すべきだと言っているわけではなく、(これから先) ラテン文字へ移行する途をとらねばならないし、改革を広めなければならないと言っているのである [Montgomery (1994), 292]

ラテン文字に関する議論はこの会議で進展することはなかったが、続く 1929 年にはラテン文字化運動がブリヤートにも到来するのである。

#### 二つの計画

ブリヤート学術センター (БНЦ) の公文書館にある諸資料はブリヤートにおけるこの時期のラテン文字改革の進行状況を教えてくれる。まず、最初の活動として目に付くのは 1

1929年当時のブリヤート・モンゴル学術委員会（当時の代表はバラディン）が1月26日に新アルファベット委員会にラテン文字アルファベットに関する資料を依頼している文書である。[БНЦ 471/1/64/58]

続いて出てくるのが、ポッペが3月9日、ブリヤート学術委員会にラテン文字の計画に関する質問を書いた手紙である。この手紙の内容は以下の通りである。

ブリヤート・モンゴル学術委員会各位

このお手紙で私がお話ししたいのは、私がメンバーとして参加している新テュルク・アルファベット中央委員会が私にラテン文字によるブリヤート・モンゴルのアルファベットの計画を作成して欲しいと依頼してきたことです。この際、中央委員会は、この要請はブリヤート学術委員会からの依頼であると言っておりました。この問題（アルファベットの作成計画）に関して私とは連絡を取らなくてもよいとお考えなのでしょうか？このことに少々驚きを感じます。一応、私は第三者の手からアルファベット案作成という仕事の依頼を受け、中央執行委員会にアルファベット案作成を引き受けることを伝えて、ブリヤートにおける文章語とアルファベットに直接関係する重要な仕事に取り組んでいるのですから。また、このような計画案の要請元である学術委員会に早急に以下の情報を伝えていただけるよう要請いたします：

1、アルファベットは狭くブリヤートのみあるいは他のモンゴル諸族にも使えるよう広くモンゴル・ブリヤートに提案されているものなのか？

2、ブリヤート語の特徴のみ考えなければいけないのか、それともモンゴル語のそれも考慮しなくてはならないのか？もしブリヤート語のみであるならば、ч、иの二つなしでも大丈夫でありましょう。ブリヤート語とモンゴル語ならば、чとи（にあたる文字）をブリヤート語ではшとсと読ませる形で、モンゴル語ではそのままчとиという音価を持たせて導入する必要がありましょう。

3、正書法は音声学的にしなければならないのでしょうか、あるいは語源解釈的にしなければならないのでしょうか？

4、学術委員会自体はどのようにお望みでしょうか？

1929年3月9日 ポッペ[БНЦ 471/1/64/69]

ここで、ポッペは新テュルク・アルファベット中央委員会の依頼でモンゴル諸語用のラテン文字化案を作成しようとしていたことがわかる。また、新テュルク・アルファベット中央委員会は、この依頼がブリヤート学術委員会によるものであると彼に説明したらしい。しかし、ポッペは何らかの形でブリヤート学術委員会がラテン文字化計画を進めていたことを知り、驚いて手紙を書いてきたようである。

なお、ポッペのこの時期より少し前の時期の活動に関しても1929年1月頃、ブリヤート学術委員会にあてた一連の書簡が残っている[БНЦ 471/1/64/1-16]。その内容は彼がかかっていた病気の病状の説明やアラル方言調査の研究の経過などについてであり、そこにはラテン文字の作成に関することは何一つとして書かれていない。また、1928年に出た論文

ではモンゴル文字をブリヤートが使っていることを評価していることから、ラテン文字化の作成は、少なくともその論文が書かれた時より後に依頼されたということは明らかであろう。[Помпе(1928), 95]

ブリヤート学術委員会はポッペからの手紙に対して3月27日に、手短に3月31日から4月16日までの間にあなたの質問にお答えするということと、また6月の初め、ポッペが調査に出かける前に会って話をしたいということが書かれている[БНЦ 471/1/64/72]。

4月8日付けになっている以下の手紙のコピーは、その回答なのであろう。

H・H・ポッペ同志

親愛なるニコライ・ニコラエヴィッチ様

新テュルク・アルファベット中央委員会があなたに(ラテン文字化案を)依頼したという報せは我々にとって、あなたがこの手紙を受け取ることよりも不可思議なことでありました。我々は新テュルク・アルファベット中央委員会にこの件の研究を依頼しておりません。

ご理解いただきたいので申し上げますが、ラテン文字アルファベット計画準備に関しては今年の最初から我々ブリヤート学術委員会が行ってまいりました。現在、計画はまとまりつつあります。近く、この問題についての(Б・バラードイン作製の)パンフレットを印刷に出すつもりです。このアルファベットの最初の試案はこのパンフレットの出版をもって専門家たちや社会にいる人々の審議にかけられます。そして、諸問題の多角的な議論の後、この改革の前進に向けての次のステップが初めて政府によって着手されるのです。

もうほとんど終わろうとしている資料の下準備へ私たちの計画の終わりに助言の形であなたにこの件に参加していただけるよう要請しようと考えておりましたし、現在も考えております。

しかし、もしあなたが新テュルク・アルファベット委員会の申し出を受け入れ、この仕事を我々と平行してするというのであれば、我々は何の異議も唱えるつもりはありません。その場合は結果としてできたものは比較する一つ一つの文字の綴りに関する最終的な改革の作製のための比較検討資料となるでしょう。

この件についてはもっと詳しくあなたと意見を交換したいと考えます。また、夏の調査が終わった頃に個人的にお会いしたいと考えております。

同志としての礼を込めて

ブリヤート学術委員会 Б・Б・バラードイン  
学術書記 Эскеэ-Вичч

[БНЦ 471/1/64/68]

しかし、ポッペが自分たちからだけの回答で満足しないのではないかと考えたからか、最初の手紙を出した3月27日に、自分たちで回答をする以前にアレクサンドル・イヴァノヴィッチなる人物に「ポッペ氏の問い合わせに困惑している。誰がHTA(新テュルク・



アルファベット委員会)に依頼したのかわからないのでそう説明して欲しい」と説得への協力の手紙を出している[БНЦ 471/1/64/108ab-109]<sup>11</sup>。

しかし、こうした説得の試みも以後のポップ氏の態度から判断するなら、多分成功しなかったと考えられる。

いずれにせよ、ここで興味深いのは偶然にも外発的な計画と内発的な運動が同時に存在したという事実である。つまり、ブリヤートが自ら計画しなくとも、ソヴィエト中央が計画し、それを押しつけていた可能性があったことを示唆しているのである。

こうして、準備が着々と進んでいった。

なおここで登場するニコラス・ポップについて少し述べておきたい。

彼は1897年中国山東省生まれ、ドイツ系の名前を持つ言語学者である。彼の言語学者としての才能には、両親の才能が関係していたようである。父親は天津のロシア帝国領事館で秘書官で働いていたがサンクトペテルブルグ大学の東洋学科卒で、中国語、満州語、ドイツ語を学んでいた人であった。母親エリザベスも「自由に話せた言葉はロシア語、ドイツ語、フランス語、英語に加えて、イタリア語、中国語があった。後に…フィンランド語も話せるようになった」というような語学の才能に恵まれた人であった[ポップ(1990), 12-15]。

彼は父親と同じサンクトペテルブルグ大学の医学部に入学するが、第一次大戦後東洋言語学部に移る。そこでルードネフ、ウラジーミルツォフ、ブルドゥコフなど名だたる学者たちと出会い、モンゴル語を学び、テュルク系の言語なども学んでいく。1925年にはすでレニングラード大学の正教授になり、1928年には31才で現代東洋語大学の正教授にもなっていた。このラテン文字化を計画していた頃はモンゴルやブリヤートなどへ調査旅行に出かけたりして精力的に方言研究の活動していた[ポップ(1990), 45-72, 112-140]。

このような中、『ブリヤートの生活』1929年第2号にΓ・リンチネの「モンゴル・アルファベットのラテン文字化問題に向けて」という論文が発表された。1930年には『新文字』という教科書も出版する言語学者と思われるこの人物の論文では、現在のモンゴル文字は欠陥があり、ラテン文字でそれを補うことが主張された。また、新しい文章語に関しては「我々のブリヤート・モンゴル語は統一されたモンゴル語族の中で孤立した、独立した方言ではない。だから、ブリヤート語の文語形成において近隣のハルハ・モンゴル語の直接的影響や、全モンゴル文学の伝統を素通りするわけには行かない。ハルハ・モンゴル口語の影響はブリヤート語の中に極めて多く見受けられる全く不必要な形の文法的な特徴の簡略化において有益なものになるだろう」とし、ラテン文字化された言語の標準方言は複雑なブリヤート語の文法よりも「音声学的に、形態論的に統語論的にもっとも簡単で、モンゴル文語に最も近いハルハ・モンゴル語を採用する」ことを主張した[Ринчинэ(1929), 60-62]。

何よりこの論文で目を引くのは「ブリヤートのもの」(Бурятияизм)に対する敵視である。「モンゴル共和国とブリヤートの人的な、文化的な結びつきを強めれば、特に西ブリ

ヤートにあるあらゆる「ブリヤートの」な文法構造が簡単になり、（煩わしさから）解放される」とまで書いて彼は文法のハルハ化を主張している[Ринчинэ(1929), 61]。

そうこうしているうちにバラーディンとポッペは別々の計画を練り発表することになる。1929年の『東方の文化と文字』誌第5号にはブリヤート・モンゴル語とモンゴル語のラテン文字化について二つの論文が掲載された。巻頭にはバラーディンの「ブリヤート・モンゴル言語文化向上の諸問題」(3p~27p)が掲載され、続いて、ポッペ氏の「新モンゴル・アルファベット作成の問題に向けて」(28p~33p)が載った。

### バラーディンの発表

バラーディンは言語学的なラテン文字化計画にはこの論文で触れず、もっぱら、ラテン文字化が何故必要なのかを論じ、その計画の具体的な進め方について論じている。

どのような技術的な利点があるかについては

1) 縦書きという、数学、科学、音楽、公式などを書く際に技術的に障害になるものを除くことができること

2) 外来語、他言語の音を書き表すことができること

3) 統一した正書法を確立することの簡便さ、読み書きの理論や実践の修得の簡便さ

4) モンゴル文字よりも印刷に関して技術的に非常に有利であること

5) タイプライターで文字を打つことができること、ヨーロッパの文字と同様の筆記体であること

とし、さらに思想的な利点については

1) 技術的、文学的な著作の自由で幅広い発展の可能性を持つこと

2) 様々な層の大衆の文盲一掃と啓蒙のため、言語の技術的な障害を取り除くことができること

3) 労働者大衆の全ての文化的な生活の領域で言語を幅広く使用できる社会の現実化の可能性を持つこと

4) 知的創造に最適であり、より完全な武器となり、話し言葉を視覚化した文字言語の創造の可能性を持つこと[Барадин(1929), 22-23]

といったことが論じられている。

付け加えられているところは、計画の遂行に関してはテュルク系民族のラテン文字化導入の経験や、ラテン文字化の指導者たちの経験、モンゴル諸語のラテン文字化擁護団体、大衆へラテン文字化を広める運動を考慮した組織化の作業や、言語学の理論と実際の面の調査研究が必要としたところである[Барадин(1929), 24]。ここから、1926年の時と違い、テュルク系のラテン文字化運動の勢いを取り入れようとしていることが見て取れる。

### ポッペの発表

続いて載せられたポッペの論文は、ラテン文字化の具体案であった。

ポッペは1910年に出たバラードインの著作からも「幾つかの彼の適切な考えはこの短い論文の中で使われている」とヒントを得たことを認め、彼の考案する文字計画を子音と母音に分けてどう対応させるかを説明している[Поппе(1929), 29]。

ここで重要なのは、ポッペもブリヤートと同時にモンゴルにも適応させるアルファベットを計画したことである。

たとえば、子音についてモンゴル語(ハルハ方言)でч、ц、дж、дзで発音されるところが、ブリヤート語ではш、с、ж、зになることから、

|       |   |   |    |    |   |
|-------|---|---|----|----|---|
| ハルハ   | ц | ч | дз | дж | с |
|       | ↓ | ↓ | ↓  | ↓  | ↓ |
| ブリヤート | с | ш | з  | ж  | h |

という図式を建てハルハ方言цと読むのであればブリヤートではсと読むようにすると言うようにすればよいと述べているのである。また、モンゴル文字において正書法規則に基づいて、ある子音の後にiをつけると別に発音になることから次に読ませることも可能と述べている。

|         |                                 |           |
|---------|---------------------------------|-----------|
| 新テュルク   | ハルハ・モンゴル語の発音                    | ブリヤート語の発音 |
| アルファベット |                                 |           |
| (ラテン文字) | (キリル文字による転写[ロシア・アカデミーの転写規則による]) |           |
| с       | ц                               | с         |
| с i     | ч                               | ш         |
| с       | дз                              | з         |
| с i     | дж                              | ж         |
| s       | с                               | h         |
| s i     | ш                               | ш         |

こうして作られたのは次のようなアルファベットである。

Таблица знаков нового алфавита.

|     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| А а | В в | С с | Ç ç | D d | E e |
| F f | G g | И и | J j | K к | L l |
| M m | N n | л   | О о | Ө ө | P p |
| R r | S s | T t | У u | У у | X x |
| V v |     |     |     |     |     |

表 3-4 1929年にポッペの提案したラテン・アルファベット案

後々のものから比べると、この時点ではポッペも、モンゴル文字とバラードインのラテン文字化案に確かに考慮が伺える。しかし、子音+iというアイデアを除けば、組み合わせる音を

表現することはせず、çやөのような特殊記号を入れることになった。

その後のラテン文字化正式決定までの経緯

АЛФАВИТ, ВЫРАБОТАННЫЙ ФЕВРАЛЬСКОЙ КОНФЕРЕНЦИЕЙ 1930 Г.

| Знаки<br>алфавита | Соответствия<br>ныне принятого<br>алфавита | Произношение в транскрипции<br>знаками русского алфавита |
|-------------------|--|--|
| a                 | a  | а  |
| b                 | b  | б  |
| c                 | c  | п  |
| ch                | с  | ч  |
| d                 | d  | д  |
| e                 | e  | э  |
| f                 | f  | ф  |
| g                 | g  | г  |
| i                 | i  | и  |
| j                 | j  | в русск. академич. транскр. j                            |
| k                 | k  | х  |
| l                 | l  | л  |
| m                 | m  | м  |
| n                 | n  | н  |
| o                 | o  | о  |
| ø                 | ø  | в русск. академич. транскр. ø                            |
| p                 | p  | п  |
| r                 | r  | р  |
| s                 | s  | с  |
| sh                | ш  | ш  |
| t                 | t  | т  |
| u                 | у  | в русск. академич. транскр. u                            |
| v                 | v  | у  |
| w                 | w  | в  |
| y                 | y  | в русск. академич. транскр. y                            |
| z                 | z  | з  |
| zh                | ж  | ж  |

1930年2月26日から3月4日にかけて正書法会議がヴェルフネウディンスクでおこなわれる。

2 1930年に採択されたアルファベット

この会議の参加者は新アルファベット（つまりラテン・アルファベット）の宣伝とアルファベットの作成の諸問題に直接携わる23人の人々とモンゴル人民共和国から二人の代表者であった。会議では4つの正報告と2つの副報告がなされた。当然、この会議にはポッペもバラードインも参加している。バラードインが「新文章語の形成に関する諸問題」と「新文章語の正書法の諸問題」という二つの発表をし、ポッペはГ.リンチノとともに「ブリヤート・モンゴル・アルファベットの統一に関する問題」を発表した。この会議で中心的な役割を果たしたのはバラードインであり、彼の希望に添ったように決定がなされたようであった。文章語のもと

となる方言がハルハ方言であることに異論を挟むようなものはいなかったようであるし、ポッペは、自分の案を提出するのみで、この会議において目立って批判的な発言はしなかったようである[p471/99]。しかし、この時ポッペ案は採択されず、別のラテン文字化が若干の修正を加えられて採用される。その時に採用されたアルファベットは図5の右の列にある様なものであった。

しかし、正書法会議で採用されたアルファベットは1930年5月にアルマアタで行われた新アルファベット委員会総会では認められず、他のテュルク・アルファベットとの統一を図るよう求められた。

1930年7月1日にはブリヤート・モンゴル語を表す文字をラテン文字とすることがブリヤート・モンゴル中央執行委員会によって正式に採用される。

この問題の最終的な結論は、序章で述べた1931年1月10-17日モスクワにおいて開かれたモンゴル諸族言語・文字問題会議でついた。この会議にはブリヤート・モンゴル、モンゴル、カルムイクの代表たちが集まり、モンゴル諸族が採用すべきモンゴル諸語統一アルファベットが決定された。

### 基礎となる方言選定の問題

以上をみて分かるように、ブリヤートが使用する新しい文章語はハルハ方言を文法的にも語彙的にも下敷きしたものであった。

1930年に入っても言語学者ボロドンがブリヤート共和国第一回会議で次のように述べている。

共通のモンゴル文語やその表現、個々の文字の形はブリヤートの子供には全く理解できない。子供たちは母語しか知らないのだ。学校の授業の一番はじめから決定的な言語政策を打ち立てる必要がある、段々とハルハ方言に近づけていくことを保証する政策を(うち立てる必要があるのである)[Исаев(1979), 215]

このような傾向は1931年、第三回共産党ブリヤート・モンゴル地方委員会幹部会で、「王侯貴族の絶滅した言葉をブリヤートに広めようとする汎モンゴル主義」と批判された。文章語を形成する際には「ブリヤート・モンゴル労働者の生きた話し言葉から」離れてはならないというのがその理由である。しかし、不思議なことに続く文章では新しい文章語の基として、「何よりも、ハルハ人民のことに一番近いセレンゲ方言」に基づいたものにすべきであると書かれていた[О культурно-национальном(1931), 16]。汎モンゴル主義を嫌う中央政府へ申し開きをする一方で、実質はハルハ方言と同じものを採用したのである。ここに至ってもまたモンゴルとの紐帯は意識されていたのである。

さらに、この1931年には言語学会議が二つ行われている。この会議は同時のブリヤートの状況を知る上では非常に重要である。

### ブリヤート・モンゴル語学戦線問題学術会議

1931年8月27日-29日、文化研究所言語文字局においてブリヤート・モンゴル語学戦線問題学術会議が行われた。

この会議においてブリヤート語学の現状と課題について話し合われ、言語学的、特にブリヤート語に関する言語学的な、理論的、実践的な誤りが指摘された。また、国際的な術語を増やすこと。正書法の改善などについても話し合われた。

この会議には学者、教師、ラテン文字化に携わる人々が参加し、主な発言者はベルタガエフ（言語文化研究所）、ダシニマイン（ブリヤート国立出版社）、ダンピノフ（ロシア・プロレタリア作家協会）、ツェレノフ（ブリヤート国立出版社）、オチルジャブ（教師）、ゴンジョバン（国立文化研究所）、フェドトフ（学生）、アバシェーフ（モンゴル労働者予備学校）、トグミトフ（国立文化研究所）などであった[Дискуссия(1931), 44]。

みたところここにはバラードインの名前はない。そのためか特にこの時のポッペの批判はすさまじい。

「ブリヤート・モンゴル語学の現状」という発表で、ポッペはバラードインを、革命前の言語学の形式主義的であると批判し、彼が1931年に出版した『新ブリヤート・モンゴル文語の文法と文字に関する簡単な手引き』での「新ブリヤート・モンゴル語の文章語の内容は…（語彙的に）はブリヤート、ハルハ、そしてその他のモンゴル諸族などの全ての主要な方言の語彙の内容を総合し選び抜いたものでなければならぬ」という発言に対して、その著作に見られる文法と事実の矛盾などを指摘した上で、その当時もはやされたマルの言語学を論拠に「このような理想を追求するような言語学は比較言語学的で、祖語というものをでっち上げている」のに等しいといい、「この理論は極めて反マルクス主義的である」と批判した[Поппе(1931), 50]。

同様に、ポッペの弟子であるブリヤート人言語学者ベルタガエフもこの会議で「事実上、モンゴル語とブリヤート語という二つの言語が存在するし、（この二つの言語は）発展の歴史的条件が違っただけでなく、規範も違うものである」と語り、この頃、主張されていたブリヤートには方言が存在し言語は存在しないと言う意見に異議を唱え、ハルハ・モンゴル語を標準方言に据え、ブリヤート語の独自性を無視しようとしていることを批判した[Выступление(1931), 70-77]。

注目すべきなのは「ブリヤートの独自性」という言葉である。ここにたって、いままでのハルハ方言との結びつきを強調していたものとは、明らかに異なる発言が出てくるようになる。

ポッペは、共産党地方委員会がセレンゲ・ブリヤート方言を標準方言に決めたことに対して、ブリヤート語とハルハ（モンゴル）語の要素から人工的に作り上げたでっち上げの言語ではなく、実際に存在するブリヤート・モンゴル語の方言であるので「正しいことであるし、適切である」と評価し、以前の発言を翻している[Поппе(1931), 53]。

さらにポッペは、新文章語の語彙がハルハ方言の特徴を持っていることに注意を喚起した。ハルハ・モンゴル語とブリヤート・モンゴル語には相互交流が見られ、その上、モンゴル文語のような「封建的」特徴を持つ言語より、実際のモンゴル語はもっとブリヤート語に近く、双方にとってお互いの言語はすぐにでも修得できる言語なのだとし、語彙がよりブリヤート化することを恐れるべきではないと発言した。1929年に言及したモンゴル文

語との結びつきの重要性に関してもここでは発言を翻しているのである[Поппе(1931), 54, 57]。

また、これから語彙の選定の際に語彙は西と東のブリヤート語に共通の語彙を選ぶべきであるとし、様々なところから人が集まるコミュニオンやコルホーズのブリヤート人達のことばを観察した結果から、「現在のコルホーズは新しい言語の鍛冶場となっている」と言い、もうすでに東と西の間ではことばの交流が始まっていると語っている[Поппе(1931), 55]。

しかし「西ブリヤートはロシア語の新聞を読み、東はモンゴル語の新聞を読んでいるので、政治などについての会話をするはっきりと両方が理解できるわけではない」とお互いの語彙の違いは文化的傾向なのだとし、だから西ブリヤートが取り入れている国際的な単語を取り入れてもいいのではと主張する[Поппе(1931), 58]。

さらには、もしもブリヤート語がもっと国際化されたのなら、もっとハルハ語も国際化されるだろうと彼は述べている[Поппе(1931), 55]。

標準方言問題、特にモンゴル語とブリヤート語の関係についてと、語彙の問題に関しては、以上のような批判的提案がなされていた。ポッペのバラードインに対する攻撃はこの後様々な形で行われ、次第に状況はポッペに有利になっていく。が、まだこのころは、ポッペに対する質疑応答で、バラードインの考え方はそう形式主義的なものではなかったのではないかというような質問が抹殺されることなく記録されているくらいで、みながポッペの側に立つと言うことはなかった。

また、この時期、セレンゲ方言を標準方言としたことに対して賛成していることから、まだモンゴルとブリヤートとの文化的な結びつきが重要であるという考えを許容されていたこともわかる。

しかし、その後、ブリヤートにおける言語の問題は別の側面に収斂してゆく。この論文においても何度か指摘した西と東の問題である。そこで次にこの年の11月に行われた西ブリヤート言語文化向上会議をみることにしよう。

## 西ブリヤート言語文化向上会議

1931年11月7日-9日、アラル県クイテで西ブリヤート言語文化向上会議がおこなわれた。この会議では特に西ブリヤート諸県の民族文化建設の基礎的問題(エグノフ)や、西ブリヤート言語文化の向上の問題(バラードイン、アバシェーフ)などに関して、議論された。

この会議には30人以上の代表者がアラル・アイマック、ボハン・アイマック、エヒリット・ブルガット・アイマック、トゥンキン・アイマックといった西ブリヤート四地区から集まった。ポッペもこの会議に参加し発表をしている。

この会議は西ブリヤートが当時、言語的状況が状態にあったのかを教えてくれる。

西ブリヤートの諸アイマックにおいてブリヤート語やラテン文字の使用を実現することは、党の業務においても、ソヴェエトの業務においても、専門家の業務などにおいても、都市部においても、農村部においても、全くなされていないに等しかった。西ブリヤートの言語状況の現状については次のような発言から伺うことができる。

特に母語による公式文書はまったく存在していない。

昨年（1930-1931年度）の西ブリヤート諸県の学校教育はロシア語でほぼ、すべて行われた。

また全ての文化・啓蒙施設の業務はロシア語のみで行われている。

現地のブリヤート人達の集会でもほとんどロシア語で会話されている。地方の新聞や壁新聞、スローガンは全てロシア語である。

知識人やソヴェエト機関の下級職員は母語の価値を全く理解せず、ブリヤート語で公式文書記録や学校をすることに懐疑的な目を向けている[Основные(1932), 12; О повышении(1932), 17]

しかし、一方でコルホーズ労働者のほとんどや、貧困層、中流層はほとんどか、全くロシア語を知らず、ロシア語で行う報告は理解できないという状態だったという[О повышении(1932), 17]。

この会議の発言者の一人であるツァフエヴァは「我々貧乏人は全くロシア語で話されてもわからない」とも発言している[Основные(1932), 12]。

どうやら、モンゴル文字による識字教育は全く成功せず、ラテン文字もまた、教科書などが不足しているという状況であつたらしい。それ故、読み書きの手段としてはロシア語がいまだ優勢であつたが、ロシア語の読み書き能力のある人は少なく、それ以上にロシア語を聞いてもわからず、自分たちのことばでの読み書きもできない人が多くいたという状況が見て取れる。

新しいブリヤート語と西ブリヤート語の関係はどうだっただろうか。

ポッペはこの会議で「西ブリヤート言語文化向上の道」という発表を行い、西と東の方言の差異を挙げ、語彙の統一を図れるよう努力するために以下のことを提案している。

1) コルホーズ労働者の言葉による文章語を創造と大衆に近い語彙や国際プロレタリアートの語彙を入れた文章語の創造。

2) 労働者の人々を考慮した新しい術語辞典の出版

3) 西ブリヤート人にわからない主要な術語についての解説付きのコルホーズ建設や、経済、様々な政治問題についての本の出版

4) 通訳や文章を書く仕事に従事している人の再研修

5) コミュンやコルホーズによる新聞などの出版の促進

6) 文盲の一掃

7) 幾らかの西ブリヤート方言の特徴を持つ文芸作品、特に子供向けの作品の執筆

8) 東西ブリヤートの定期的な教師の交換

9) 言語学セミナーの開催



10) 方言の調査

11) 幹部の養成[Поппе(1932a), 30-32]

提案の存在は、解決されていない問題として存在することを意味した。会議では最終的にポッペの提案に出たものなどを含めた20項目の提案がなされた。とくにこれらの中で注目すべきは次の四項目である。

2) 西ブリヤートの方言に近づけた新(ブリヤート・モンゴル)文章語による出版すること

15) セレンゲの学校から招いた教師による、教師の再研修コースを組織すること

16) 西ブリヤートのためにあつらえた初等教育の教科書と大衆文学を出版すること

18) 西ブリヤートの方言に近づけた文章語による文学の出版の組織すること [О повышении(1932), 18]

これらの提案は、新しい文章語と西ブリヤート方言との間に語彙的・文法的な差異が存在し、大きな問題になっていたことを示している。また、先のブリヤート・モンゴル語学戦線問題学術会議でポッペが指摘したように、東西の交流はあったものの、東西の文化的志向の差によって語彙的な差異は拡大する可能性もあった。エグノフは西ブリヤートのコルホーズ労働者などが、東ブリヤート方言で行ったバラードインの発表を理解したと語っているが、実際のところどうだったのか疑問である[Егуннов(1932), 10]。バラードインの発表は、ブリヤート語で行われたものであったかも知れないが、残念ながら資料はロシア語で残されており、内容を語彙や文法の面から分析することは不可能である。

後にツェデンダンバーエフが1973年になって書いた論文においては西ブリヤートでブリヤート語の文章語が成果を得られなかったことに関して、西ブリヤートの方言のために、「特別な文章語とは言わなくても「文章方言」を作る必要があったのではないか」と書いている。ここではそれに近い提案がなされているが、それは実現しなかったようである。そして、その現状はそのまま続き、西ブリヤートは軽視され、東ブリヤート主導のままで標準語が確立されたのである[Цыдендамбаев(1973) 84-85]。

この会議の資料から考えると、西ブリヤートの言語的な状況は、まだこの当時、セレンゲ方言をそのまま導入するなど考えられない状況で「土着化」はまったくすすんでなかったと推測できそうである。

### ラテン文字によるアルファベットと正書法と二人の関わり

ブリヤートにおけるラテン文字アルファベット採用までのプロセスは先ほど見ていただいたとおりだが、最終案はニコラス・ポッペが提示したものであると彼自身は主張している。繰り返しになるが、1929年彼が提示した案とは別の案が1930年2月に採択されるが、1930年5月の新アルファベット委員会総会で認められず、他のテュルク・アルファベットとの統一を図るよう求められた。その後1931年1月にモスクワでモンゴル共和国、カルムイク、ブリヤートの代表者が参加した会議で最終的なラテン文字アルファベットが採用さ

れる。そのアルファベットは新テュルク・アルファベットに基づいたものであり、おそらく、彼の主張している通り、ポッペの案によるものであろう。筆者がこう考えるのには理由があるが、それは後に述べることにしたい。

しかしアルファベットを決めるだけで言語政策は終わらない。正書法やどの方言で書くかというような問題も残っていた。

1930年、ヴェルフネウディンスクにおいて正書法会議がおこなわれたとき、バラードインが発表したのは文章語に関する問題と、正書法に関する問題であった。この会議にはポッペも参加したが、何の論戦もなく終わる。

すでに、1931年にブリヤートで行われた二つの会議における時の彼ら二人の論戦について書いたが、その論戦は1930年にポッペが『東方の文化と文字』第6号に発表した「新しいモンゴル・アルファベット再考」においてこの正書法会議の結果決まったアルファベットを批判したところから始まるようである[Поппе(1931)]。しかし、この論文においては、1930年の正書法会議で決まったアルファベットの批判にのみ終始していた。

翌1931年にはバラードインとポッペが、その年に出版したお互いの本（ポッペは『モンゴル口語実用教科書』、バラードインは『新ブリヤート・モンゴル文語の文法と文字に関する簡単な手引き』）を書いている）の書評をしている。お互いがお互いをけなしあう論戦の本格的な火蓋はどうやらこの書評から始まるようである。というのも、これらの書評と同じ雑誌に載ったバラードインの「ブリヤート・モンゴルの新しい言語文化の一連の課題」ではポッペに対する批判もなく、まだ正書法に関する細々とした論戦に入っていなかったことを示しているように思えるからである[Барадин(1931a)]。

バラードインはこの書評で、本の中にある文法的に、または正書法的に問題のある箇所について頁を挙げながら批判し、「今もなおインド・ヨーロッパ言語学の構図と術語から脱却していないようである」と当時の流行であったマルを援用して批判している[Барадин(1931b)]。この批判のスタイルはその後、1933年に出版されるバラードインの『新文章語文法』でみられる批判と同じである[Baraadiin(1933), 3-4]。

一方のポッペによる書評の批判内容は1931年のブリヤート・モンゴル語学戦線問題学術会議で行ったものと全く同じである。この書評が書かれた時点はまた、セレンゲ方言への方言変更も決定されていなかったもので、その観点からの批判はくわえられていない。しかし、正書法の問題を挙げながら、ここでもマル的な「祖語」という言葉をつかってバラードインを批判している[Поппе(1931a)]。また、バラードインがウラジーミルツォフやポッペなどの研究を「役に立たない」といったのがよほど気に入らなかったのか、今回出た『モンゴル口語実用教科書』は「ウラジーミルツォフ、ラムステッド、コトヴィッチ、そして自分の作品を土台に作った」作品でバラードインにとって「極めて有益だろう」と皮肉を込めて述べている[Поппе(1931a), 59]。

この後、何度となく繰り返されるこの二人の間で行われた議論を概観すると、ポッペがバラードインを批判し、バラードインがポッペに反論するパターンが見える。

1933年に出版された『ブリヤート・モンゴル語学』で、ポッペはブリヤート語の言語政策において彼が中心的な役割を果たしたような印象を与えようとしている[Поппе(1933)]。

しかし、そう主張することに反するように、度重なるバラードイン批判をポップ自身が見せねばならなかったということそれ自体が、正書法、方言選定、語彙の問題など文字以外の分野について、バラードイン主導で決められていたことを示しているように思えるのである。

しかし、その1933年の初頭までには、バラードインは昔ほどの勢いを失っていたと思われる。この年、バラードインは『ブリヤートの文化』誌に「私の過ち」という自己批判の文を送っている。送らなければならなかった背景は、明らかではないが、そこでは1) 「レーニンと少数民族」という論文で「マルクス-レーニン主義の思想を仏教の教えと同一視した」こと、2) 1926年の民族文化会議での汎モンゴル主義的な発言などには誤りがあったと自己批判をしたのである[БНЦ P 471/132/7]。「私の過ち」は『ブリヤートの文化』の編集先であるブリヤート文化研究所に書簡の形で出されたらしく、その書簡は1933年2月8日に審議され「このような(政治的、理論的な)過ちはバラードインが述べたような偶然の過ちではなく、明らかに民族主義的で汎モンゴル主義的な思想の現れであり、プロレタリアート社会主義の前進に反対する余命幾ばくもないような階級にたいする闘争において、我が国におけるそのような階級の抵抗による階級闘争の発生と疑いなく結びついていた組織的な性質のものだった」と非難された[БНЦ P 471/132/1]。このことによって、彼の影響力が減じたことは明らかである。

それでも、その後の1933年7月14-18日、ヴェルフネウディンスクでおこなわれた「言語と文学に関する地方会議」に彼は参加している。会議には60人以上が参加し、論争となっているブリヤートの正書法の問題についてのバラードインの報告が審議検討された。しかし、すでにこのころから主導権はバラードインの手から離れ、彼の意に添うような結論は得られなくなっていた[Цыдендамбаев(1973), 71]。

1933年『ブリヤート語文法』をブリヤート語で出版し、1935年には『言語文学関係術語ロシア語ブリヤート語辞典』を出版した。さらにラテン文字でブリヤート語の文学作品を幾つか書くなど、創作活動は衰えなかった。しかし、同じ1935年、彼は中央の科学アカデミー東洋学研究所へと送られ、そこからレニングラード大学へモンゴル語教師として派遣された[Неизвестные(1991), 18]。しかし、1936年、ポップからベルタガエフに宛てた手紙には「バラードインが来た。まだ失業中だが、見つかるチャンスはほとんどないようだ」と書き送っている。ブリヤートから追い出され、さらにレニングラードでも苦しい状況にいたようである[Хамарханов(1998), 103]。1937年2月20日、彼はレニングラードで「反革命組織のスパイ」として逮捕される。1937年8月24日に彼はレニングラード軍事法廷で死刑の宣告を受け、程なくして刑は執行された[Неизвестные(1991), 19-21]。

ハルハ方言から、セレンゲ方言に標準方言を移し替えた大きな理由は、文字を作る際には民衆の口からでた言葉を基にすべきであるからということであった。ブリヤート語にとってハルハ方言は「外国の言葉」でありその民衆の言葉ではないと見なされたのである。こうして、セレンゲ方言が採用されることとなった。しかし、それではセレンゲ方言に特徴的な言葉使いは文章語に反映され、ハルハ方言とは違うものとなったかといえ、そこ

は非常に曖昧なままであった。また、セレンゲ方言も西ブリヤート言語文化向上会議でバラディンが認めたとおり、ブリヤートの人口の10%ほどが話す方言であり、のこりの90%とは文法的にはっきり別の特徴を持っていた[Барадин(1932), 20-21]。

何よりもセレンゲ方言はブリヤートの中心都市ウランウデで話される方言ではなかった。西ブリヤート方言の話者としては語彙的にも文法的にも遠かった。このようにセレンゲ方言の地位は不安定であり、その地位を支えるものはモンゴル語との結びつきのみだった。

こうなればセレンゲ方言はハルハ方言と同じであると見なされ、ブリヤートの独自性を明確に打ち出すために、他の方言を標準方言とすべきだと主張するものが出てくる可能性は十分にあった。

そして1936年6月、ブリヤート・モンゴル自治社会主義共和国言語会議が招集され、ホリ方言が標準方言として提案される。

### 1936年の言語会議

1936年6月1日-7日、ウランウデにおいて、ブリヤート・モンゴル自治共和国中央執行委員会附属国立言語文学歴史研究所主催の言語会議が行われた。

この会議の参加者は120人。この会議では3人の正報告と8人の副報告がなされた[Бурят-монгольская правда(1936)]<sup>iii</sup>。このころ、政治的な闘争に敗れバラディンはすでにレニングラードへ追放されていた。一方のポッペはこの会議に参加し、「ブリヤート・モンゴル文章語と方言との関係」「ブリヤート・モンゴル語の文法的分類について」という二つの発表をしている。

これらの報告の中で、ホリ方言への標準方言の変更を示唆したのは、ダンピロンが発表した「ブリヤート・モンゴル文章語の創造の決算と近い将来の課題」とその副報告だった。以下にダンピロンの主張と、補助報告の一つゴンボインの「ブリヤート・モンゴル新文章語の正書法に関して」を取り上げ、方言の変更の根拠となる議論をどう展開したかを述べたい。

中央執行委員会議長であったダンピロンは次のような発表を行い、方言の変更を主張した。

彼は、まずそれまで言語建設を概観し、先に取り上げたバドマエフなどのロシア化を肯定的な見解を批判し、また、バラディンや、ツイビコフを汎モンゴルの意見を持つものとして批判した[Дампилон(1936), 5-14]。

また、その際に1929年にバラディンが「ブリヤート・モンゴル言語文化向上の諸問題」を発表してラテン文字化運動が開始されて以降も、1926年の文化民族会議での決定通り、ハルハ・モンゴル語を標準方言にする方針をとり続けたことを批判し、その上、リンチネが「ブリヤートのもの」までを嫌ったことを批判した[Дампилон(1936), 15-17]。

しかし、1931年9月に共産党州委員会がハルハ方言を否定しながら、非常に近いセレンゲ方言に標準方言を設定したことは批判していない。逆に、「ブリヤート・モンゴル労働

者の生きた話し言葉から」離れてはならないという言葉の評価し、この時から「ラテン文字化の実際の重要な課題」が始まったとしている[Дампилон(1936), 18, 22]。

おそらく、共産党地方委員会が批判されなかった原因は、バラードインが所属していた文化研究所を反革命的で汎モンゴル主義的なブルジョワ民族主義者分子が活動していた場所だと非難した1935年1月21日の共産党地方委員会の決定が存在したからであろう。それで委員会は「免罪」された。バラードインに対しては1933年に出されたバラードインの著作の中から幾つかの単語を抜き出し、「この本には彼の以前の[ハルハ・モンゴル語を標準方言とした文章語の]計画の名残りが全て収まっている」と批判した[Дампилон(1936), 24-25]。

そして「言語建設の理論と実践から残りのバラードイン一派を完全に根絶しなければならない」と呼びかけ、さらに方言研究の、言語学の領域でのマルクス・レーニン主義の実践を主張し、「この会議では生きた話し言葉へのよりさらなる接近という意味での正書法の改善、明確化の問題について真剣な議論をしなければならない」と提案する[Дампилон(1936), 25]。

さらに彼は1931年の共産党州委員会の批判に立ち戻り、再度検討して、その一番の優先順位が文章語の「幅広く様々な層の大衆が理解しやすさと親しみやすさそしてそれらの人々の話し言葉との或る一定の関係」にあることを指摘する[Дампилон(1936) 31-32]。

そして、「ブリヤート諸方言の中でもっとも発展し、もっとも完全な文法形態」を持っている「東ブリヤート方言がブリヤート・モンゴル文章語の基盤となる方言とならなければならない」と彼は主張したのである[Дампилон(1936), 33]。

一方の副報告者ゴンボインの主張はどうだっただろうか。

彼はブリヤート・モンゴル語はまだ欠陥はあるものの、基本的には満足できるとして、その理由に現在の正書法は以下のような3つの特徴を挙げている。

- 1) 音声-形態的原則に従っている。
- 2) 簡単な記号で成り立っている。
- 3) 形態論的な原則にたった正書法の規則も充分受け入れられるものである

[Гомбоин(1936), 20]<sup>iv</sup>

しかし、彼が一番大きな成功とみたのは「バラードインのような言語学者の一部が考えたch、sh、zhといった文字から現在のç、s、zのような文字にした」ことだった。彼は、バラードインがこういった組み合わせで表現することが「印刷や、タイプライターなどの技術的なものを考慮に入れて作られたものだろう」とわかっているながらも、「結局、西欧の貧しい歴史的な正書法を取り入れようとしている」ことだとみなした[Гомбоин(1936), 23]。

そして、ちょうどダンピロンが主張したように、人々の話し言葉に近づけるために「早急の解決が求められている」正書法の問題としてセレンゲ方言にあるような特徴をあげ批

判したあと、「ブリヤート語とは異質なハルハ・モンゴル方言、セレンゲ方言の格変化体系や格語尾を整理する」ことを提案した[Гомбоин(1936), 24]。

また、今までのセレンゲ方言（彼の表現ではs-方言）の支持者に対して「ブリヤート人とハルハ・モンゴル人が統一した文章語を持つべきである」というというs-方言支持者の思想は称賛に値する」としながらも

1) モンゴル人民共和国はまたラテン文字に移っていない。

2) モンゴル語とブリヤート・モンゴル語は近い親戚のようであるが、独立した民族語であり、お互いに著しく違う規範を持つ

3) ハルハ・モンゴル語の正書法は音声的でなく、難解で極めて古い要素を持つ正書法でブリヤート・モンゴル語の方がより簡単である

といった理由を挙げ方言の変更を主張する[Гомбоин(1936), 25]。

第5章でくわしくとりあげることになるが、ここでモンゴル国について述べられたことはほぼ事実である。1930年にモンゴルは1933年までにラテン文字を国字とする計画を建てていたが、この頃には全くその動きも止まり、再びラテン文字化が提案されるのが1940年だったのである。

また、ここで、モンゴル語とブリヤート・モンゴル語は別のことばであるという主張が繰り返された。

興味深いのは三つ目の主張である。これは、1929年に「ブリヤートの」なものを複雑とみたリンチネの主張と正反対である。蔑視するものへの態度は、いずれの場合にも、こじつけの理由をもって根拠と成している観が拭えない。しかし、ここでの発言はこの頃の正書法がモンゴル文字の正書法を引きずっていたという意味にもとれないことはない。

とまれ、こう主張して彼は「現在の文章語を生きた口語に近づけるという目的に一番正しいのは（セレンゲ方言がsと発音するところで）hを発音する方言（以下h方言）を採用することである」として、「今の文章語の正書法ははっきり言ってしまえばハルハ・モンゴル語」であるから「生きた口語」を採用するようにと具体的な提案を提示したのである[Гомбоин(1936), 31]。

こうした議論を受け、1936年8月20日にブリヤート・モンゴル中央執行委員会幹部会および共産党ブリヤート・モンゴル地方委員会ビューロー幹部会（1936年8月20日 No. 152/8）において次のような決定が出される。

1、ブリヤート・モンゴル文章語の発展の基礎的な出発点となる原則に、特にブリヤート・モンゴル語学の諸問題の理論構築において、（ブリヤート・モンゴル民族民主主義者がおいたモンゴル文字あるいは人工的に広められたハルハ・モンゴル語の規範ではなく）ブリヤート・モンゴルの労働者の大部分に言語に特徴的な全ての音声的、文法的な特徴を

反映し、新しい社会主義的、国際主義的な形式と言語自体の発展の概念を考慮に入れた、幅広い人民大衆の言語の理解しやすい、簡単な言語でなければならない。

ブリヤート・モンゴル文章語はブリヤート・モンゴル語の現存する全ての方言の語彙内容を持たねばならず、旧モンゴル文語の肯定的な面、そして、現代ハルハ方言の形式な、内容の簡明さや明解さを学んだものでなければならない。

2、このような原則に対応するようなブリヤート・モンゴル語に独特な諸規範と、東ブリヤート・モンゴルのh方言（つまり、ブリヤート・モンゴル語の全てのh方言全体をまとめたもの）を新ブリヤート・モンゴル文章語の基礎としたブリヤート・モンゴル語の文法を再構築する。

3、現存のブリヤート・モンゴル新アルファベットに次のような補整を導入する。

a) 音素hを表すのに現在使われている文字sに代え、文字hを使用する。

б) 文字sは今後、借用語、特にハルハ・モンゴル語のsojolやbolbosorolといった類のブリヤート・モンゴル語に入った単語の音素を表すものとして使用される。

в) 文字cとçは借用語と固有名詞を表すものとしてのみ保持される。

г) 文字şは使われていたçやsの代わりにブリヤート・モンゴル語で使用される。

д) 音素xを表すために、現在使用されている文字kに代え、文字xを使用する。文字kは借用語と固有名詞の音素kを表すものとしてのみ保持される

е) *культууре*や*maldanь*といった音節の最後の軟音化された子音を表すために文字ьを使用する。

ж) *ө* と *y* の短母音はブリヤート共和国内の大衆の大部分の方言では判別の困難な音素であるので、ただ<y>一つで表し、文字*ө* も二つ連続した形 (*ө ө*) で*bө ө re*、*ө ө rө ө* などのような単語の長母音を表すものとしてとして残す。

...

ブリヤート・モンゴル自治共和国中央執行委員会委員長 И・ダンピロン

全連邦共産党ブリヤート・モンゴル地方委員会書記 М・エルバノフ [Дампилон(1936) 46-48]

こうしてブリヤート語はモンゴル語のハルハ方言に近いセレンゲ方言から、東ブリヤートのホリ方言へと基礎方言をかえることが正式に決定された。

### ポッペは標準方言をホリ方言にすることを知っていたのか

この会議において1936年ホリ方言採用が決定されることを事前にポッペは知っていただろうか？ブリヤート学術センター公文書の中には、1936年1月、レニングラードにいるポッペに、ブリヤート・モンゴル語の辞典の監修を依頼する文書が残されているが、言語学会議への参加の要請もその同じ手紙でなされていた [БНЦ Р 471/184/52]。会議が終わり、標準方言がh方言に変更されることが決定されると、この変更に伴いブリヤート文化研究

所は、すでに印刷所に入っていて脱稿済みであった『ブリヤート・モンゴル語文法』に修正をほどこす必要があるという理由で印刷所に返却を要請している [БНЦ P 471/184/167]。

監修を依頼されていたブリヤート・モンゴル語の辞書については、どうやらこの会議の結果からか、出版されることはなかったようである。これらの資料から見た事実から結論を言えば、彼は何も知らなかったということになる。

しかし、ポップェと弟子のベルタガエフとの間でやりとりされた手紙では、そうともいえない事実が書かれている。ハマルハーノフによって編集、公開された 1936 年から 1941 年までの間に、この二人の間で交換された手紙の中には、ホリ方言をもとにした新しい正書法にかんしてやりとりしている部分が残っているからである [Хамарханов (1998)]。

この手紙でポップェは直接正書法の作成には携わっていないものの、ベルタガエフの質問あるいは要請に応じて、助言を与えている。例えば以下のようなものである。

…正書法に関してですが、いくらかブリヤート化させるべきなのかと私は思います。たとえば、対格の接尾辞ですが、-ügi は必然的に -ijji に替え、共同格の -taigaa は -tajaa (akatajaa) に替えるべきでしょう。h で発音する方言（つまりホリ方言）が政治的に許容できるもので時期的に適切であるということに関して、私にははっきりとしたイメージがありません。また、もしかしたら ø を排除すべきなのかも知れません。つまり kyl, nyker (kyløer, nykerøer など) などと書くということです。というのも、ツォンゴル (セレンゲ) の人々でさえ、ø と y を取り違えるからです。それから、- を入れて書くところや、分かち書きするところをはっきりさせるべきでしょう。例えば jabaasan jaba san, kyn saa, kyn-saa, kynsaa (もしも人が) というものです。ここには、大きな意見の不一致があります。私は - を入れて書きます。私は個人的には c や ç という文字の排除や、(hain, sahan などの) h と発音する方言に反対するものではありません。また、x とは別に k を導入すべきでしょう。たとえば kara ではなくて Karl Marks とか。それから、外来語や国際語にかんしては歪ませずに Kaarl Maargs ではなくて Karl Marks などと書くべきだと考えます。最近、私は Magsiim Goorki をいうのを見ました (何と驚くべきものでしょう!) [Хамарханов (1998), 103]

と、かなり思いつきでつらつらと書かれたようなこの手紙がいつ出されたものかがはっきりしない。この前の手紙の日付は 1936 年 3 月 25 日、次の手紙は 11 月 7 日とあるので、その間ということになるだろうか。言語学会議もちょうどこの間の 6 月に行われている。ここに残されている助言と前記のホリ方言への移行を記した決定と比べれば、手紙は決定以前に書かれていたものである可能性は十分にある。もし 6 月以前のものであれば、彼がホリ方言に変わることを事前に知っていた決定的な証拠となるものである。個人的な意見という形で書かれているが、この手紙で彼ははっきり、ホリ方言への意向には反対しないと書いている。また、「h で発音する方言が政治的に許容できるもので時期的に適切であるということに関して、私にははっきりとしたイメージがありません」という表現は、ホリ方言への移行が彼の主導でなされなかったこと示している。

ここからは余談になるかも知れないが、彼はその後、こうつぶけている：



ミハイル・イワノビッチ（・カリーニン）の発言は非常に貴重で面白いものだと思います。彼はまったく正しいです。一連の小さな少数民族は共通する国際語に統一されなければならないでしょう。しかし、ブリヤートはこの例には入りません。ブリヤートはハルハと一つになることはありません、なぜなら、ハルハは新しい文字を持たないからです。また、カルムイクとも一つになりません、力に歴然とした違いがあるからです。こういったことは必要のないことなのです。ブリヤートは20万人いますが、ここで議論されているのは人口3000-5000人の民族についてなのです。ブリヤートの諸条件においては、西ブリヤートを実際に引き付けるような路線をとり、さらに（文章語の）ブリヤート化を進ませて西ブリヤートにとって、別の特別なものとしないう路線を取るべきなのだと思います[Хамарханов(1998), 103]

カリーニンがいったのは恐らくロシア語という「国際語」での統一ということであろう。が、ベルタガエフは、この議論にかこつけて、モンゴルやカルムイクと言語を統一する必要があるのではないかと質問したようである。1931年、ブリヤート・モンゴル語学戦線問題学術会議で「事実上、モンゴル語とブリヤート語という二つの言語が存在する」といったベルタガエフであったが、その前の文章とあわせて読めば、正書法を作成しつつも、何故ホリ方言にしなければならないのかに疑問を感じていたようである。そして、ポッペはその疑問・質問に対し、政治的な風向きが彼にそういわせたのかも知れないが、ブリヤートは独立した言語であるべきだと答えたのである。

改訂して出版された1938年の『ブリヤート・モンゴル語文法』の前書きには出版が遅れた以上のような事情は何も書かれていない[Поппе(1938), 3-6]。1936年に出されていたとすれば、彼はどのような前書きを書いていたのだろうか？1936年に脱稿済みだった原稿の行方は不明である。

彼が議論をしていたバラードインはもうこの世になく、改訂され出版された本の前書きは今までのような攻撃的なものはなかった。正書法にも、方言変更にも直接立ち会わなかったことは、キリル文字化の時期にラテン文字化に携わった人々へ加えられた攻撃から考えると、もうすでに彼自身の立場も危うくなってきたことの現れだったのかも知れない。

### バザル・バラードインの理想

キリル文字化の議論に入る前に、最後に、そしてバザル・バラードインの理想としていた言語はいかなるものであったのかをここで確認してみたい。

すでに確認したように彼が言語改革を他のブリヤート人たちと本格的に議論し始めたのは1902年のことだったという。そのような議論の結果から1910年にラテン文字でブリヤート諸方言を書き取った本を出版する。この本に載っているアルファベットで特徴的なのは前舌母音のüとöがそれぞれeu, eoと表記され、アルファベット本来の文字以外の記号を加えていないことである。

最終的に採用されたアルファベット案は、対照的に、母音、子音ともに一字一音の原則

に従ったものであった。同じ原則に則ったものは1929年にポッペが発表したときの案にも見える。こう考えてみると二人のアルファベット案の間には、できるだけ26文字に修めるという原則と、一字に対して一音をあてるという原則の違いがあったということができよう。そう考えて1930年2月に採用されたアルファベット案を見ると、このアルファベット案がバラディンの原則によって構成されたものであることがわかるはずである。

この原則を彼は最後まで捨てなかったようである。

1935年に出された『言語文学関係術語ロシア語—ブリヤート語辞書』の「中国語のラテン・アルファベット」の項にはこう書かれている：

中国語のラテンアルファベット ソヴィエト連邦領内に住んでいる中国人に向け、新アルファベット中央委員会の科学協議会の作成したもの。28文字の構成は:a、b、c、ch、d、e、f、g、j、i、k、l、m、n、ng、o、p、r、rh、s、sh、t、u、w、x、y、z、zhである。このアルファベットは新トルコ特殊アルファベットのç、s、z、øなどの形の悪い文字のない国際的に良い原則をもつアルファベットである。我々の新しいアルファベットの幾つかの適さない形の文字の使用をやめるときには採用したいアルファベットである[baradiin(1935), 64-65]

つまり、バラディンは1910年から1935年までの25年間、アルファベットに関する原則を一貫して変えずに保ちつづけたのである。

そしてまさにバラディンのこの発想が1936年、ゴンボインに「西欧の貧しい歴史的な正書法を取り入れようとしている」と非難されることになったのである。

繰り返しになるが、1926年、1929年と二回にわたってラテン文字化に関して発表したとき、彼が強調したのは、タイプライターや印刷技術におけるラテン文字の有利さであった。そして、もし特別な記号を使わず、英語のように26文字で全てを書き表すことが可能になるならば、タイプライターは特別にあつらえたものではなく普通にあるものがそのまま導入できると考えたのである。

さらに、1926年の第一回民族文化会議において彼は英語教育をしようと提案している[Бардин(1926b), 17]。ヨーロッパの大陸部を見聞した記録はあるが、彼が実際にイギリスに行ってものごとを見てきたという記録はない。しかし、英語を学ばせようとした背景にはイギリスの発展した科学技術を取り入れようとする姿勢があるように思える。そして、その英語がやはり26文字で全てを書き表していたこともこのような発想に影響したとは考えられないだろうか。

知識というものに人々は唯一全てのことがわかる母語によってのみ簡単に到達できるはずである。生まれたときから使っていた言葉で読み書きのできる、勉学に励んだ民族は発展するが、そうでない民族は言葉を失い、他の民族の能力に従わされ、獣のようになり、衰亡していくのである[Baradiin(1910), 37]

1910年こう説き、自らの言語を守り抜くための方法を考えたバラティンは、モンゴル諸族の結びつきを保ちつつ、近代化するためにヨーロッパとの結びつきも持とうと考えた。それはまるで革命前にボグダノフが残したペシミスティックな発言を乗り越えようとするかのごとき試みであった。しかし、そうした努力をあまり多く人が理解してなかったことも事実のようである。1929年に彼が行った発表の次のような言葉は、近代化するために、反対する人々を押さえ中央の力を借りてでもラテン文字化を進めようとしたことを物語っているかのようである。

現代のモンゴル諸族の大衆はまだ上に述べたような視覚的な言語（訳注：モンゴル文字）の欠陥を感じられはしないだろう。全ての知的要求がまだ穏やかで、制限されたものであるうちは、モンゴル諸族がヨーロッパの文化や技術が（入ってくること）によって極めて深く乱されないうちは、そして文化の強化や大衆の識字や啓蒙の必要性の問題さえないうちは、モンゴル文字で全ての知的要求が満たされるのであろう。

（しかし）世界経済や世界文化に巻き込まれ、教科書や手引きをまとめることから、識字や啓蒙の大衆化の必要性をみだす現代の科学技術を真剣に習得しなければならない段階までモンゴル諸族が到達するのは、そう遠くないことである。その時には技術的に不完全な文字である古くさいモンゴル文字が現代科学技術の障害となることは避けられない。このような状況はブリヤートにおいてずっと前からわかっていたことだったし、（だから）上で述べたように様々なアルファベットの改革の試みが見られたのである。しかし、それらの試みは成功したといえず、また時期的にも適したものとはいえず、何の現実的な成果をもたらさなかった[Барадин(1929), 18]。

「しかし今ならばラテン文字化によって近代化できる」。それが1929年の発表の意味だったのである。

### 3-4、キリル文字化へ(1938～)

ホリ方言への以降を決めた会議の翌年である1937年、ソヴィエト領内では大粛清の嵐が吹き荒れる。この粛清によりブリヤートの言語政策に関わった人々も多くが命を落とした。それに前後してソ連領内の文字を与えられた民族語におけるラテン文字の使用が次々と廃止されてゆく。ある言語はキリル文字に文字を変え、他の言語は文字自体の使用が廃止された。ラテン文字化の次の波、キリル文字化の波がブリヤートの岸に押し寄せるのは、それからほどない1938年6月のことである。

1938年6月20日、ブリヤート国立言語文学歴史研究所の言語会議が行われた。参加者は55人であった。

## АЛФАВИТ И ОСНОВЫ ПРАВОПИСАНИЯ БУРЯТ-МОНГОЛЬСКОГО ЯЗЫКА.

Бурят-монгольский алфавит состоит из следующих  
36 букв:

|     |    |    |    |    |    |                      |    |                     |    |                      |    |    |
|-----|----|----|----|----|----|----------------------|----|---------------------|----|----------------------|----|----|
| Аа  | Бб | Вв | Гг | Дд | Ее | Ёё                   | Жж | Зз                  | Ии | Йй                   | Кк |    |
| а   | бэ | вэ | гэ | дэ | е  | ё                    | жэ | зэ                  | и  | несло-<br>говое<br>й | ка |    |
| Лл  | Мм | Нн | Оо | Өө | Ээ | Пп                   | Рр | Сс                  | Тт | Уу                   | Үү | Фф |
| эль | м  | эн | о  | өө | пэ | эр                   | эс | тэ                  | у  | ү                    | эф |    |
| Хх  | Һһ | Цц | Чч | Шш | Щщ | Ъ                    | Ы  | Ь                   | Ээ | Юю                   | Яя |    |
| ха  | һа | цэ | чэ | ша | ща | твёр-<br>дый<br>знак | ы  | мяг-<br>кий<br>знак | э  | ю                    | я  |    |

### 3 1939年に採用されたキリル・アルファベット

この会議においては術語（ダシツィレノフ）、ラテン文字からキリル文字への文字の移し替え（ベリガエフ）、ブリヤート・モンゴル語の学校における教育（ダシエフ）について検討された。

なお、ポッペは1938年のキリル文字化を決定した会議には参加していないようである[ポッペ(1990)]。

すでにこの会議が始まるまでにキリル文字化案が4人の学者によって提出された。サンジェーエフ（「ブリヤート・モンゴル文字と正書法の基礎計画」）、ダシエフ（「ロシア文字への移行計画」）、アモゴロノフ（「ブリヤート・モンゴル語文字としてロシア文字を採用するための計画」）である。

会議ではブリヤート語のキリル文字化案に対して、参加者ほとんど全員がブリヤート語のキリル文字化に賛成したという[Цыдендамбаев(1973), 77]。

1939年の終わりにブリヤート国立言語文学歴史研究所によって準備された研究所の文書によれば、アルファベットと正書法の採用された最初の草案は、先の会議決定を受けてか、1938年6月28日からサンジェーエフの計画を基礎としたものであったという。そして、この草案は1939年初め、ホリ県、セレンゲ県の労働者集会や、専門家の間で審議された[Цыдендамбаев(1973), 77-78]。

最終的にこの案でブリヤート語の文字をキリル文字とすることが、ブリヤート・モンゴル自治共和国最高ソヴィエト令によって1939年5月1日に「人民の要求を考慮し」決定された。この案に積極的に参加したのはГ・Д・サンジェーエフ、Д・Д・アモゴロノフ、Д・Д・ダシエフ、Ч・Ш・シャグダロン、М・Н・イメヘノフ、Д・Д・ドゥガルジャボン、Д・М・ミジドンらであった[Алфавит(1939), 1; Цыдендамбаев(1973), 77-78]。

1939年7月にははやくもキリル文字のパンフレットが出版された。キリル文字化は方言変更を伴わなかったため、正書法的には1938年のポッペの『ブリヤート・モンゴル語文法』でのラテン文字正書法の原則がほとんど踏襲されているようである。

ブリヤート語の表記をラテン文字からキリル文字に代える根拠を、1939年に発表されたベリガエフの論文「ロシア・アルファベットへブリヤート・モンゴル語の表記を移行することに向けて」では次のように説明している。

1) ブリヤート・モンゴル語の全ての音声を表すためにはラテン・アルファベットの字母は全く充分ではない。

2) 綴りの多様な構成やコンビネーションの存在、一つの音を伝えるために二つ文字を書かなければいけないこと。

3) ソヴェティズムと国際主義の科学技術用語が必要となったブリヤート語において、ラテン文字では発音を歪めずにはこれらの単語を伝えられなくなってしまっている。

4) 二つのアルファベットの同時並行学習は、子供たちは勿論のこと、成人にとっても紛らわしくて大変難しいものである[Бельгаев(1939), 5]

ここから読みとれるのは、ロシア語がかなり意識されているということである。特に4) は1938年ロシア語の学校教育における義務化が布告されていることと関連しており、キリル文字のロシア語と紛らわしいので民族語をラテン文字で書くのを止めてしまえと言うかなり暴力的な論であり、こうしてロシア語教育のために民族語教育に干渉していることが読みとれる[Бельгаев(1939), 6]。

このように、キリル文字化の理由として、ロシア語との関係を強調する例は、その他のソヴェト領内の民族言語やモンゴル語でもあった(例えば[Исаев(1979), 254; Шагдарсүрэн(1992), 128; 田中克彦(1975), 163]などを参照)。

こうして、モンゴル語を意識し、ハルハ方言をもとにした言語を作り上げようとしたブリヤート・インテリゲンツィアの試みは、ブリヤート南部の方言から、ウランウデ近郊のことばへの方言の変更、そしてロシア語を意識したキリル文字化によって終わる。モンゴルにおいても1941年からキリル文字化がなされたが、ブリヤートとは別の原則を持つものであった。こうして、ブリヤート語は視覚的に別の言語として形成されることとなったのである。

### キリル文字化とポップェ

最後にキリル文字化とポップェの役割に関して検討しておきたい。キリル文字化案が採用されたサンジェーエフはポップェと同じレニングラード大学にいたモンゴル学の大家ウラジーミルツォフの弟子であり年齢もあまり変わらなかった。

サンジェーエフは1902年、現在のイルクーツク州ウスチオルダ・ブリヤート自治管区にあるアラル地区のタイシンの生まれである。1917年チェレムホボにある商業学校に入学、1920年、4年生の時に中退し、その後4年間、教師として働く。働く傍らで1922-1923年にはイルクーツク大学の聴講生となった。聴講していたヴィノグラドフの授業に魅せられ、フォークロア研究を志すようになる。こうして彼は1924年、レニングラードの現代東洋語大学のモンゴル部に入学することになる。

1927年、ウラジーミルツォフに課題を与えられ、はじめてモンゴルに行き、民族学的な調査を行う。この調査に基づいて後年『ダルハド方言とフォークロア』が書かれる。

1929-1931年、レニングラードで大学院生となり、フォークロア収集にいそしんだ。また、こういったフォークロア研究が彼を次第に方言研究へと導いたという。こうして1930年代初めから彼は言語学を集中的に研究するようになってゆく。

1931年から彼はモスクワにある東洋学大学モンゴル学部の学部長として働くことになり、1934年ごろから言語学に関する著作が現れ始める。

キリル文字化が決定したときには35歳ないし、36歳であったということになる。

実は、サンジェーエフは先の1927年のモンゴルでの調査をポッペと共同で行っている。続く1928年にはサンジェーエフがポッペを故郷のアラル地方に連れて行き方言調査をさせている[ポッペ(1990), 120]。また、サンジェーエフはポッペの著作から良く引用していたし、ポッペはサンジェーエフのフォークロアに関する著作を高く評価していたという[Алпатов(1999), 13]。非常に友好的な関係であったということができよう。

しかし、1931年、サンジェーエフがモスクワに移って、自分の学派を作り上げる頃から次第に関係は悪化していったのだという。

1941年に出版されたサンジェーエフの『ブリヤート・モンゴル語文法』の前書きでは「この作品はH. H. ポッペの『ブリヤート・モンゴル語文法』の続編のようなものであり、ブリヤート・モンゴル語の品詞と統語論を主に明らかにしたものである」と書かれている[Санжеев(1941), 1]。しかし、内容的にはポッペに対して批判的なものであった。

1942年ポッペは北コーカサス地方滞在中にドイツ軍の占領を受ける。そして1943年退却するドイツ軍とともに彼はドイツへと逃亡し二度とソ連の地を踏むことはなかった。第二次世界大戦後、さらに彼はアメリカへと移住し、1991年に亡くなるまでシアトルで過ごすことになる。

こうして、別々の国に暮らし始めた後も彼らは敵対的な関係を続ける。

ポッペはサンジェーエフを批判し続けた。そのおかげか60-70年代には、「祖国を裏切った」ポッペの本は禁書のような扱いになり、引用されたとしても、著者の名前がかれない様な状況になっていた。

結論としていうならば、このような敵対関係にあった以上、1938年の言語学会議に招待されなかったのも当然であっただろうし、ポッペがキリル文字化に関して何らかの役割を果たしたとは考えられない。

1941年、おそらく彼がソヴィエトにいた時分に書いたブリヤートに関する最後の論文であろう「ブリヤート・モンゴル語の方言研究」では、ブリヤート語は方言ではなく、言語であることをことさらに強調している。そして、ブリヤート語の諸方言の特徴を、ところどころ新しい文章語の正書法にも触れながら、解説している[Поппе (1941)]。

しかし、この論文には今までのような正書法に対しての批判は全くないが、キリル文字化への賛美もない。

ブリヤート語はホリ方言への変更、キリル文字への文字の移行など、1929年に『東方の文化と文字』に「新モンゴル・アルファベット作成の問題に向けて」を発表した頃と比べると全く違ったものになってしまったが、ポッペが批判の声を上げていないことは、以前とは状況が違い、それが唯一身を守る方法だったからなのだろうか。

1928年に書かれた論文と題名が酷似する論文「ブリヤート諸方言研究に向けて」の導入部分で、ポッペは様々な民族語の危機的状況を説明しながら次のように述べている。「モ

ンゴル諸族全般のものであるという長所を持つ、共通モンゴル語を文章語として使っているブリヤートは他のソヴィエト連邦に住む多くの民族よりも、幸運な状態にいる。なぜなら彼等は、自分たちの民族語の文字をもち、他の民族のように急いで文字を作り上げる必要がないからである」 [Поппе(1928), 94-95]。

しかし、こう書いた彼がこの10年間でとった行動は、ここで彼がいつていることとはまるで違うものであった。

次の第四章では、ソヴィエト内でのもう一つのモンゴル系民族カルムイクに関して検討していくことにしたい。

---

i 1 現在のブリヤートのことで、別にモンゴルを合わせた表現ではない。1958年まで、民族名称はブリヤートではなくブリヤート・モンゴルであり、彼らの話す言語はブリヤート・モンゴル語とよばれていた。

ii 1 ポッペの回想録から、イニシャル A. И. で該当しそうな人物を捜してみたところ、A. И. ウオストリコフのみ該当した。彼は1935年ポッペと共著で『バルグジン・ブリヤート年代記』を翻訳・出版している。彼についてポッペは「私の後輩で、チベット語、サンスクリット語学者で、シチェルバツキーの学生であった」と述べている [ポッペ(1990), 170]。

iii 1 Цыдендамбаев(1973) 71 では正報告5、副報告6となっている

iv 1 ここでいう形態論的な原則とは具体的にはburiaatと書かず、buriaadと書くこと（この単語に母音ではじまる語尾が付くと語末の子音が有声化するものであること）を指している。